中野谷地区遺跡群発掘調査概報1

―昭和63年度県営畑地帯総合土地改良事業横
野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

1990

群馬県安中市教育委員会

中野谷地区遺跡群発掘調査概報1

―昭和63年度県営畑地帯総合土地改良事業横
野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

1990

群馬県安中市教育委員会

中野谷遺跡群発掘調査概報Ⅰ　　正誤表

頁	行	誤	正
P.7	3行	（Ⅵ）	（Ⅵ層）
P.13	7行	全体にに	全体に
P.35	4行	遺構ごとにに	遺構ごとに
P.35	25行	黒浜式器	黒浜式期

下塚田遺跡全景

北下原遺跡・中原遺跡・落合原遺跡全景

序

安中市は浅間山、妙義山の麓に広がる田園都市です。碓氷川の南に広がる肥沃な台地は安中市でも有数の農業地帯であり、その一角に中野谷地区があります。今回の発掘調査は、この地域の農地を現代社会に見合った機械化された耕作を行うために実施された、畑地帯の土地改良事業に伴うものです。

今回の調査では、中野谷地区遺跡群のうち、下塚田遺跡、北下原遺跡、落合原遺跡、中原遺跡の4遺跡が発見され、調査されました。これらの遺跡では、縄文時代から平安時代までの間、人々がさまざまな生業を営んでいることが判明いたしました。縄文時代の人々は山野の幸を糧に素朴な生活をし、古代の人々は鍛冶屋を営み、馬を飼うことをなりわいに生活していました。こうした遺跡の様子を後世の人々に伝えてゆくために、発掘調査により記録保存の措置を講じております。

埋蔵文化財は地下にひっそりと眠っているため、その上で耕作を行っている現在の農家の方々もその存在に気付いていないこともあります。しかし、いったんその眠りからさめた埋蔵文化財は、二度と同じ状態に戻すことができません。そこで、こうして発見された文化財は広く郷土の歴史を学習する資料として、有効に活用してゆかなければなりません。社会教育、学校教育の生きた教材として、活用してゆきたいと存じます。

最後に、今回の発掘調査にご協力いただきました地元の地権者をはじめとする皆さまや、調査に従事していただいた大勢の方々にはこの場を借りて厚くお礼を申し上げたいと存じます。

平成2年3月

安中市教育委員会

教育長　佐藤三木岩

例　　言

1　本書は高崎土地改良事務所が実施した昭和63年度県営総合土地改良事業横野平地区の埋蔵文化財発掘調査概報である。

2　昭和63年度に調査を実施した遺跡は、下塚田遺跡（略称G－６A）、落合遺跡（G－６B）、北下原遺跡（G－６C）、落合原遺跡（G－６D）、三本木遺跡（G－７）、中原遺跡（G－８）であるが、本報告書はこのうち、下塚田遺跡、北下原遺跡、落合原遺跡の調査概報である。

3　発掘調査及び遺物整理は昭和63年度・平成元年度文化財保存国庫補助金、県費補助金及び、群馬県高崎土地改良事務所からの委託金により実施した。

4　発掘調査は昭和63年度に実施し、遺物整理は昭和63年度と平成元年度に実施した。

5　調査は安中市教育委員会社会教育課主事大工原豊、千田茂雄が担当し、主査松本豊が主として現場庶務を行った。

6　調査組織は次のとおりである。

安中市教育委員会事務局

教育部長	上原満雄	主査	松本　豊
社会教育課長	茂木勝文	主査	森泉寿義雄
社会教育係長	反町良一（平成元年４月転出）	主事	田中秀雄
	伊藤惣一	同	大工原　豊（担当）
		同	千田茂雄（担当）

7　本書の編集は大工原が行い、執筆分担は次のとおりである。

大工原　　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（土器を除く）・Ⅵ―２

千田　　Ⅴ・土器・Ⅵ―１

8　遺構の写真撮影は原則として大工原と千田が行ったが、航空写真は（有）青高館に委託して行った。

9　遺物実測及び遺構・遺物のトレース、土器拓本の作成は、大工原　豊、千田茂雄、新井幸介、新井真弓、井上慎也(立正大学学生)、金井京子、小林豊、田村悦子、中川京子、森由一、和田宏子、田中昭人（茨城大学学生）が行った。

10　調査区の国家座標取り付け及び、測量基準杭の設置は（株）桜井測量設計事務所に委託して実施した。

11　今回の調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

12　発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表

したい。(敬称略・50音順)

坂口一　志村哲　能登健　福田豊彦

13　発掘調査及び遺物整理従事者は次のとおりである。

新井幸介　新井真弓　秋山広吉　井上慎也　猪狩幾三　石井久子　上原和夫　大塚すえ子　岡田実夫　小野泰野　金井京子　金井武司　小板橋秀吉　小林豊　坂本勇次　斎藤説成　清水正　下マスエ　白石俊子　神宮幸四郎　神宮秀岳　鈴木茂美　鈴木八郎　須藤三郎　須藤ダイ　多胡梅子　多胡かつ子　多胡靜　多胡末子　多胡光子　多胡トシ　多胡信子　多胡政子　多胡操　多胡光子　多胡好江　高橋さと子　高橋敏男　滝沢保　田島元治　田島かつ子　田島保市　田中昭人　田中利策　田村悦子　中川京子　遠間節子　古立京　松本恭子　黛弘義　丸岡民子　森由一　山田きの江　山村ヨネ子　湯川光子　和田健太郎　和田宏子

凡　　例

1　下塚田遺跡の全体図の縮尺は1/2,000、北下原遺跡・落合原遺跡の全体図は1/2,000である。

2　住居址、溝（土層断面）の縮尺は1/80である。

3　遺物の縮尺は次のとおりである。

縄文土器、石器（大形）　1/3

石器（石鏃、石匙）　2/3

土師器、須恵器、羽口　1/4

4　H－1・3・4住居址のスクリーントーンは鍛冶の炉を示している。

5　土層説明の中での記号、略称は次のとおりである。

色調　＜：より明るい方を示す（例　1＜2：1より2の方が明るい）

しまり、粘性　◎：あり、○：ややあり、△：あまりない、×：なし

混入物　◎：大量、○：多量、△：少量、×：なし、

ＲＢ：ロームブロック、ＲＰ：ローム粒子、ＷＰ：白色粒子

6　石器の分類は注連引原II遺跡の分類（大工原　1988）の分類規準に基づく。なお、結晶片岩製の磨石等については、D類とせず、C類に含めた。

目　　次

序

例　　言

凡　　例

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　調査の方法と経過 …… 1

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 4

Ⅳ　層　　序 …… 7

Ⅴ　遺　跡　各　説 …… 8

1　下塚田遺跡 …… 8

(1)　遺跡の概要 …… 8

(2)　縄文時代の遺構と遺物 …… 8

(3)　古墳時代～奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 22

2　北下原遺跡 …… 25

(1)　遺跡の概要 …… 25

(2)　縄文時代の遺構と遺物 …… 25

(3)　奈良・平安時代の遺構 …… 31

3　落合原遺跡 …… 32

(1)　遺跡の概要 …… 32

(2)　縄文時代の遺構と遺物 …… 32

Ⅵ　成果と問題点 …… 35

1　縄文時代前期前半の土器群について …… 35

2　縄文時代前期前半の石器群について …… 36

挿図目次

第１図　中野谷地区遺跡群位置図…… 2
第２図　遺跡位置図…… 3
第３図　調査区設定図……折
第４図　基本層序柱状図…… 7
第５図　下塚田遺跡全体図……折
第６図　Ｊ－１号住居址実測図……11
第７図　Ｊ－１号住居址出土の遺物……12
第８図　Ｈ－１号住居址実測図……14
第９図　Ｈ－２号住居址実測図……15
第10図　Ｈ－３号住居址実測図……16
第11図　Ｈ－４号住居址実測図……折
第12図　古墳時代～
奈良・平安時代の遺物……20
第13図　Ｍ－１号溝・Ｍ－２号溝
土層断面図……22
第14図　北下原遺跡・落合原遺跡全体図…折
第15図　Ｊ－２号住居址実測図……26
第16図　Ｊ－２号住居址出土の遺物……27
第17図　Ｊ－３号住居址実測図……28
第18図　Ｊ－３号住居址出土の遺物……29
第19図　Ｍ－４号溝・Ｍ－５号溝・
Ｍ－６号溝土層断面図……31
第20図　Ｊ－４号住居址実測図……33
第21図　Ｊ－４号住居址出土の遺物……34
第22図　前期前半のＡ類の石材組成……36

図版目次

図版－１　下塚田遺跡Ａ区全景、Ｊ－１号住居址全景
図版－２　下塚田遺跡Ｂ区全景、Ｈ－１号住居址全景、Ｈ－１号住居址炉、Ｈ－１号住居址竈
図版－３　Ｈ－２号住居址全景、Ｈ－２号住居址竈、Ｈ－３・４号住居址遺物出土状況
図版－４　Ｈ－３号住居址全景、Ｈ－３号住居址炉
図版－５　Ｈ－４号住居址全景、Ｈ－４号住居址確認状況、Ｈ－４号住居址炉
図版－６　Ｍ－１号溝土層断面、北下原・中原・落合原遺跡全景
図版－７　Ｊ－２号住居址、Ｊ－２号住居址炉、Ｊ－３号住居址、Ｊ－３号住居址炉、Ｍ－４号溝土層断面、Ｍ－５号溝土層断面
図版－８　Ｊ－４号住居址全景、発掘作業状況

I　調査に至る経過

昭和61年９月、高崎土地改良事務所より、県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協議を行いたいとの申し出が、安中市教育委員会にあった。そこで、二者の間で協議を行い、今後の対応を円滑に行ってゆくために、埋蔵文化財の調査に係る覚書を交換した。安中市教育委員会としては早急に対応を図る必要があると判断し、該当地区について、昭和61年度に詳細分布調査を実施し、遺跡の分布状態についての実態を把握することに努めた。また、その調査結果を高崎土地改良事務所に伝達し、土地改良事業と文化財保護の調整を行うため再三に渡り協議を行ってきた。

しかし、土地改良事業の推進は地域の農業振興にとって長年の懸案事項であり、地元地権者の要望も大きいことから、事業を実施することが決定した。そこで、安中市教育委員会では高崎土地改良事務所と埋蔵文化財の保護についてさらに協議を重ね、事業実施によって影響を受ける部分については、発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。

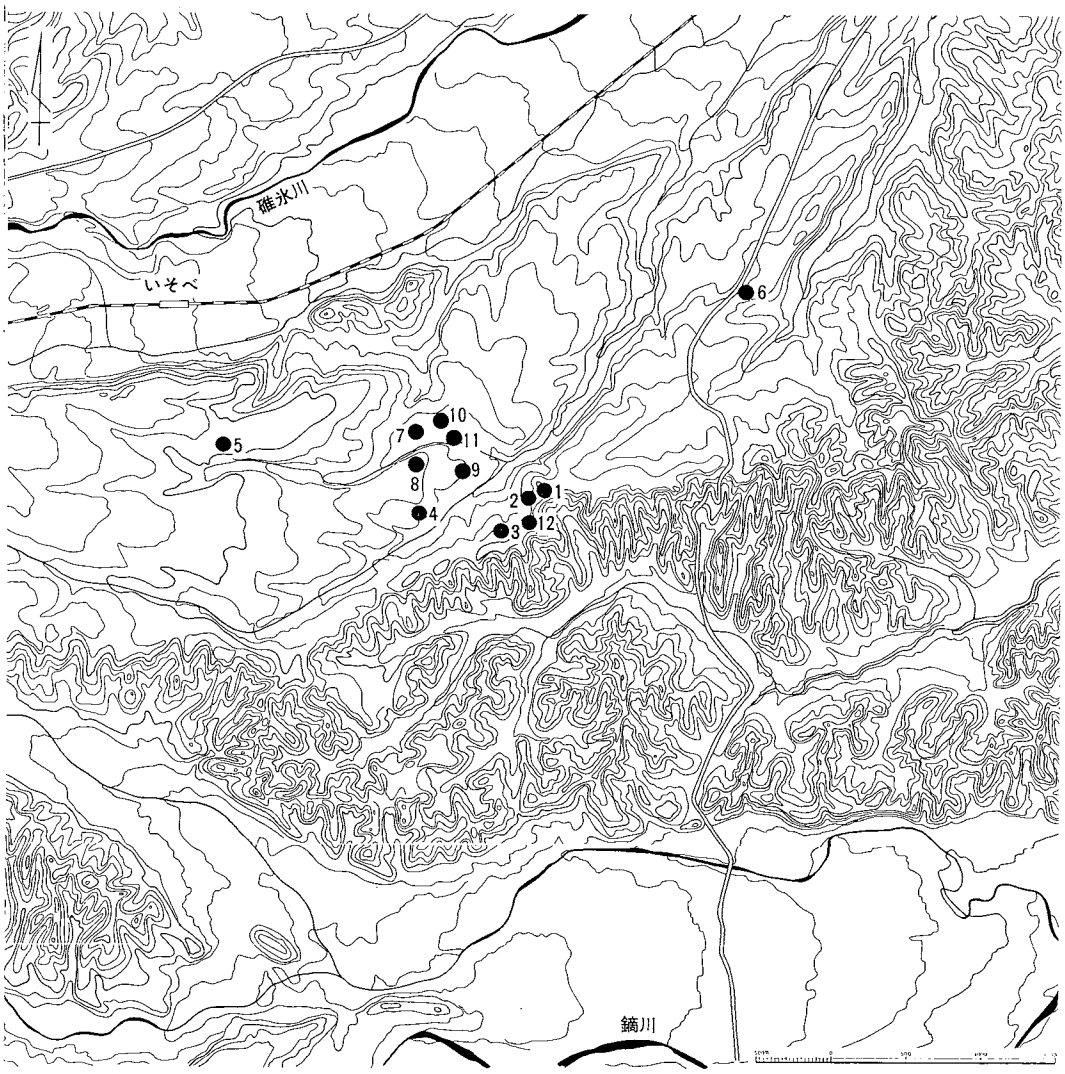
II　調査の方法と経過

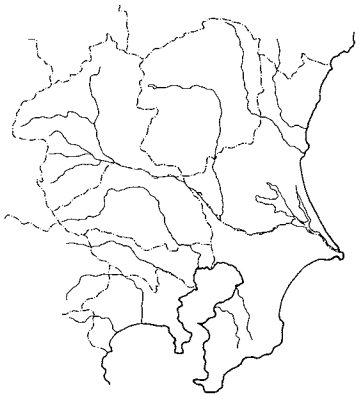
中野谷地区遺跡群の発掘調査は、広大な区域について、数カ年にわたって継続的に実施されることと、遺跡が方々に点在することが予想されることから、土地改良事業実施区域全体を含む範囲に100m×100mの大グリッドと４m×４m小グリッドを併用するかたちでグリッドを設定した。グリッドの呼称は北西隅の座標値とすることとし、北から南へアルファベットでA、B、C……Y、西から東へ算用数字で１、２、３……と４m進法で呼ぶことにした。そして、南北方向はアルファベットの先頭に１、２、３……と算用数字を付けて、100mでアルファベットが一巡するようにし、Aのラインを大グリッドのラインとした。また、東西方向は25n＋１（n＝０、１、２、３……）のラインを大グリッドのラインとした。

グリッドの方向は調査の効率化を図るため、土地改良事業の道路予定線に直行するようにした。今回の調査では土地改良事業の基準杭D－１とD－３を結んだラインとD－２とD－１５を結んだラインを基準ラインとすることにし、D－２より南へ５m移動した点を２P－101と呼称することにした。

そして、これらの座標値は国家座標に取り付けた。２P－101はX＝32477.449、Y＝-86412.759、H＝229.85、６X－101はX＝32045.449、Y＝－86413.429である。（第３図）

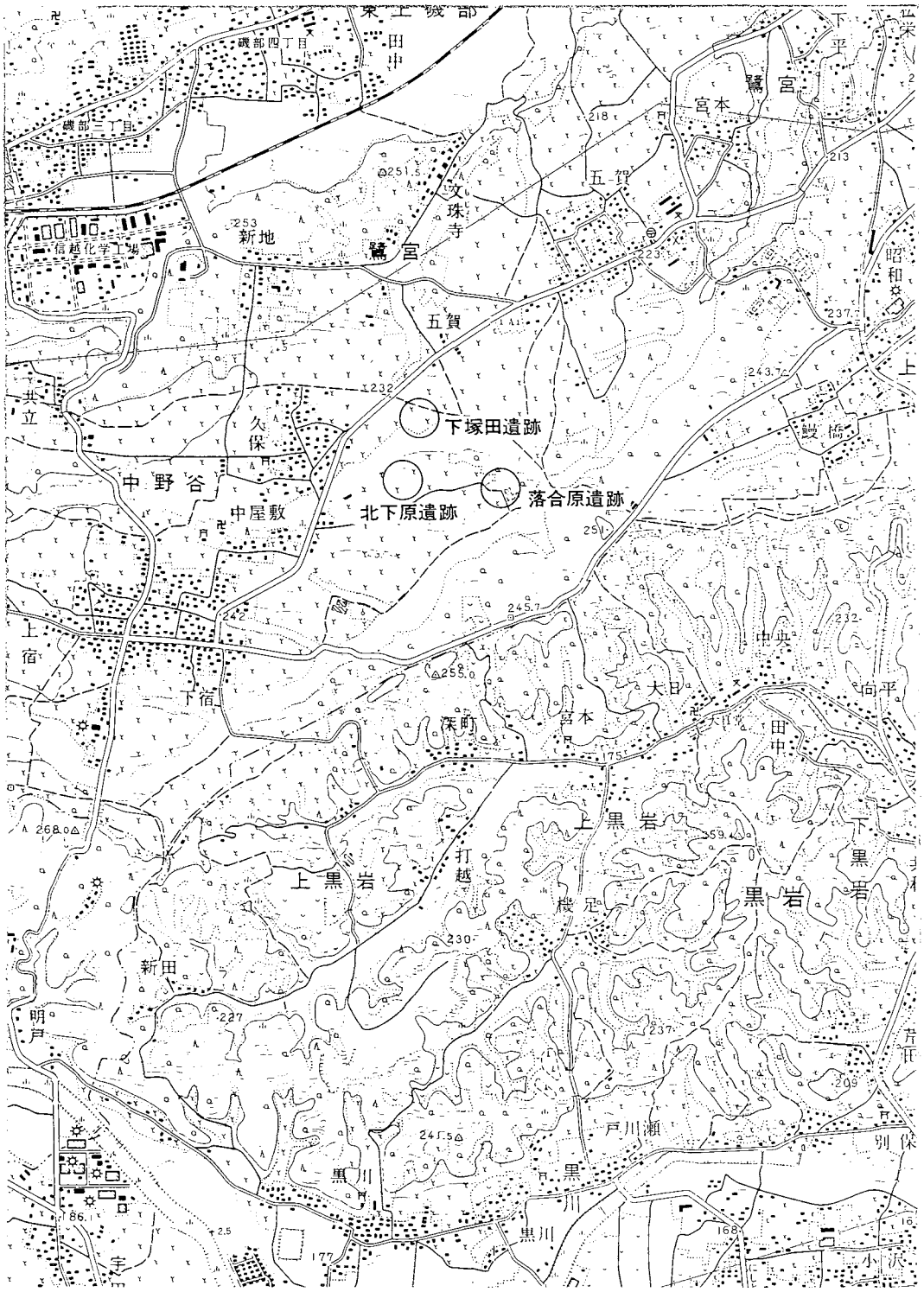
発掘調査は道路・水路部分に沿って実施した。そして、遺構・遺物が濃密に存在し、かつ切土等で遺構に影響を及ぼすと判断される部分については、拡張して調査区を設定した。作業の工程





1．注連引原Ⅱ遺跡
2．注連引原遺跡
3．下　原　遺　跡
4．中　原　遺　跡
5．天神原遺跡
6．道前久保遺跡
7．下塚田遺跡
8．北下原遺跡
9．落合原遺跡
10．落　合　遺　跡
11．三本木遺跡
12．大下原遺跡

第１図　中野谷地区遺跡群位置図



第２図　遺跡位置図（１：25,000）

は原則として、調査ライン測量、バックホーによる表土掘削、遺構確認作業、遺構精査、遺構写真撮影、遺構平面図・遺物分布図・セクション図作成の順に行った。

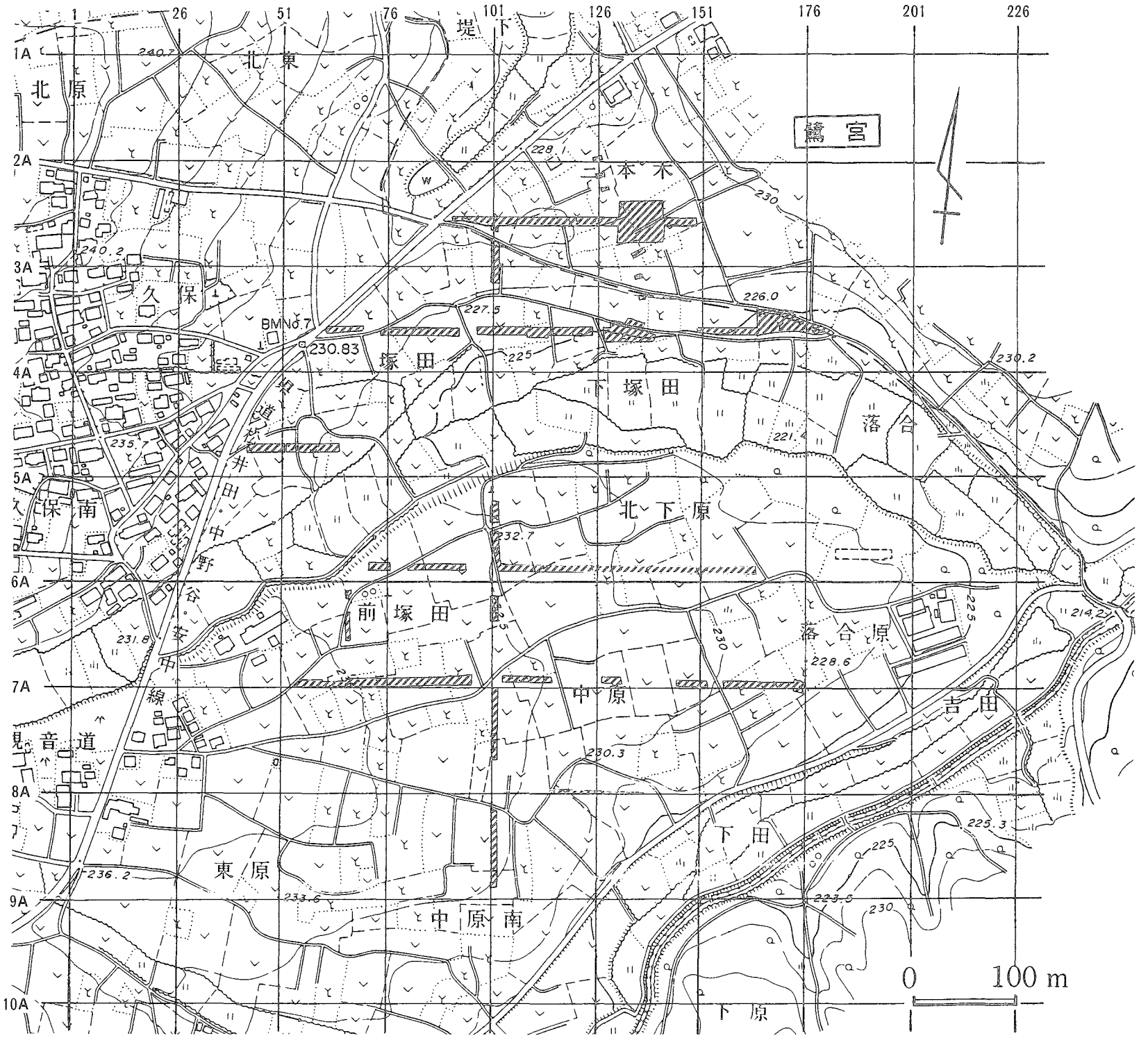
遺物整理作業は遺物の水洗・注記→接合・復元→拓本・実測→トレースの順で行い、並行して遺構図面の整理・作成→トレース、各種台帳作成、写真整理を行った。

発掘調査は昭和63年12月９日から平成元年２月25日まで実施した。また、遺物整理は平成元年２月10日から３月31日までの間と、11月１日から平成２年１月12日までの間断続的に実施した。

III　遺跡の地理的・歴史的環境

中野谷地区遺跡群は、群馬県安中市中野谷に存在する。本遺跡群は安中市の南西部に位置し、碓氷川上位段丘のなだらかな台地の最も発達した部分にあたる。台地の南部は碓氷川の支流猫沢川が西から東へ流れ、その南側に存在するなだらかな丘陵地から分離している。また、台地の内部は猫沢川に通じる小規模な河川により開析され、東西に細長い幾つもの台地に区分されている。今回調査を実施した下塚田遺跡(7)は中野谷字下塚田、鷺宮字三本木地内に存在する。北下原遺跡(8)は字北下原、字前塚田地内に存在する。落合原遺跡(9)は字落合原地内に存在する。これらの遺跡のうち北下原遺跡、落合原遺跡は猫沢川本流に隣接する台地に存在し、下塚田遺跡はその北側の台地上に存在する。

次に、周辺の遺跡を外観する。下塚田遺跡の存在する台地には、縄文時代前期から中期にかけての三本木遺跡(11)、旧石器時代から平安時代にかけての低地遺跡である落合遺跡(10)が存在している。また、この台地の奥には縄文時代後・晩期の天神原遺跡(5)がある。一方、北下原遺跡などが存在する台地上には、平成元年度調査により奈良・平安時代の牧の存在が確認された中原遺跡(4)は北下原遺跡を含むかたちで、その南に広がっている。そして、弥生時代前期から中期にかけての注連引原遺跡(2)・同II遺跡(1)は猫沢川を挟んで落合原遺跡の南東に存在している。猫沢川の南岸丘陵には他に、弥生時代中期前半期の下原遺跡(3)、縄文時代前期を中心とする大下原遺跡(12)が存在する（第１図・第２図）。


鷲宮
北原
北東
堤下
二本木
久保
塚田
下塚田
落合
北下原
久保南
前塚田
落合原
中原
吉田
観音道
東原
下田
中原南
下原
0
100 m

第３図　調査区設定図

Ⅳ　層　　序

中野谷地区遺跡群の基本層序は第４図のとおりである。示準テフラは浅間Ａ軽石層（Ⅰｂ層）、浅間Ｂ軽石層（Ⅱｂ層）、板鼻黄色軽石層（Ⅵ）が今回の調査では確認されている。以下に各層の特徴について述べることにする。

Ⅰａ層　黒褐色土層　浅間Ａ軽石を多量混入する。現在の耕作土層で、しまり、粘性はない。

Ⅰｂ層　灰白色軽石層　浅間Ａ軽石（As－Ａ：1783年）の純層。層厚は攪乱を受けていない場合約20cmであるが、ほとんど除去されている。

Ⅱａ層　黒色土層　浅間Ｂ軽石を多量混入する。しまり、粘性はない。この層も存在しないことが多く、溝状遺構の覆土上層などとして存在する。

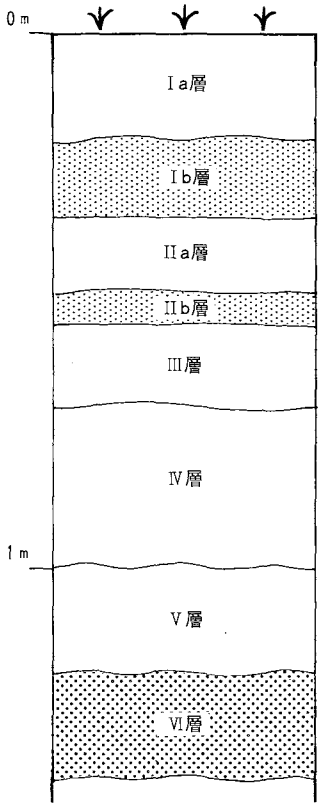
Ⅱｂ層　灰褐色軽石層　浅間Ｂ軽石（As－Ｂ：1108年）の純層。通常はほとんど存在しないが、溝状遺構の覆土上層などに存在する。

Ⅲ層　黒色土層　粘性はややあるが、しまりはあまりない。As－Ｂはまったく混入しない。平地でも存在するが、耕作等の影響で存在しない場合もある。古墳時代～平安時代の遺構の覆土としても存在する。

Ⅳ層　暗褐色土層　Ⅲ層より明るく、しまり、粘性ともある。通常この層の上面で遺構が確認される。縄文時代の遺物も包含される。

Ⅴ層　黄褐色粘質土層　この層からローム層となる。粘性、しまりともある。As－YPの粒子を混入する。いわゆるソフトローム層であるが、この地域ではソフト化されていない。

Ⅵ層　黄色軽石層　浅間山を噴源とする板鼻黄色軽石（As－YP：約1.3万年前）の純層。しまり、粘性ともない。縄文時代前期の住居址はこの層を掘り抜いたところ（Ⅶ層上面）を床面としている。



第４図　基本層序柱状図

V 遺 跡 各 説

1 下塚田遺跡

(1) 遺跡の概要（第5図）

本遺跡は縄文時代前期前半期から後期までの集落遺跡と、古墳時代後期から平安時代にかけての生産遺跡である。

縄文時代では前期前半期を主体としており、住居址1軒、ピット数基が検出された。また、中期後半期では土壙が数基と遺物集中地点が数カ所検出された。こうした遺物集中地点は耕作により大きく攪乱を受けており、本来は遺構が存在した可能性がある。

検出された遺物は、縄文時代前期前半（関山、黒浜）、後半（諸磯ａ～ｃ）、中期前半（阿玉台）、中期後半（加曽利Ｅ）、後期前半（堀之内）であるが、主体となるのは前期前半の遺物である。

古墳時代から平安時代にかけての遺構は鍛冶工房とみられる特殊な住居址4軒と、ほぼ同時期とみられる溝3条を検出した。鍛冶工房とみられる住居址は台地の南縁部に集中して存在し、最も古い段階のものはＨ－１号住居址で、７世紀のものである。

溝のうち最も大規模なものはＭ－１号溝であり、台地を南北に横切っており、通常の集落を区画するものとは異なる機能を有していた施設とみられる。また、他の2条の小規模な溝はＭ－１号溝と直行または平行しており、同時期のものと推定される。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

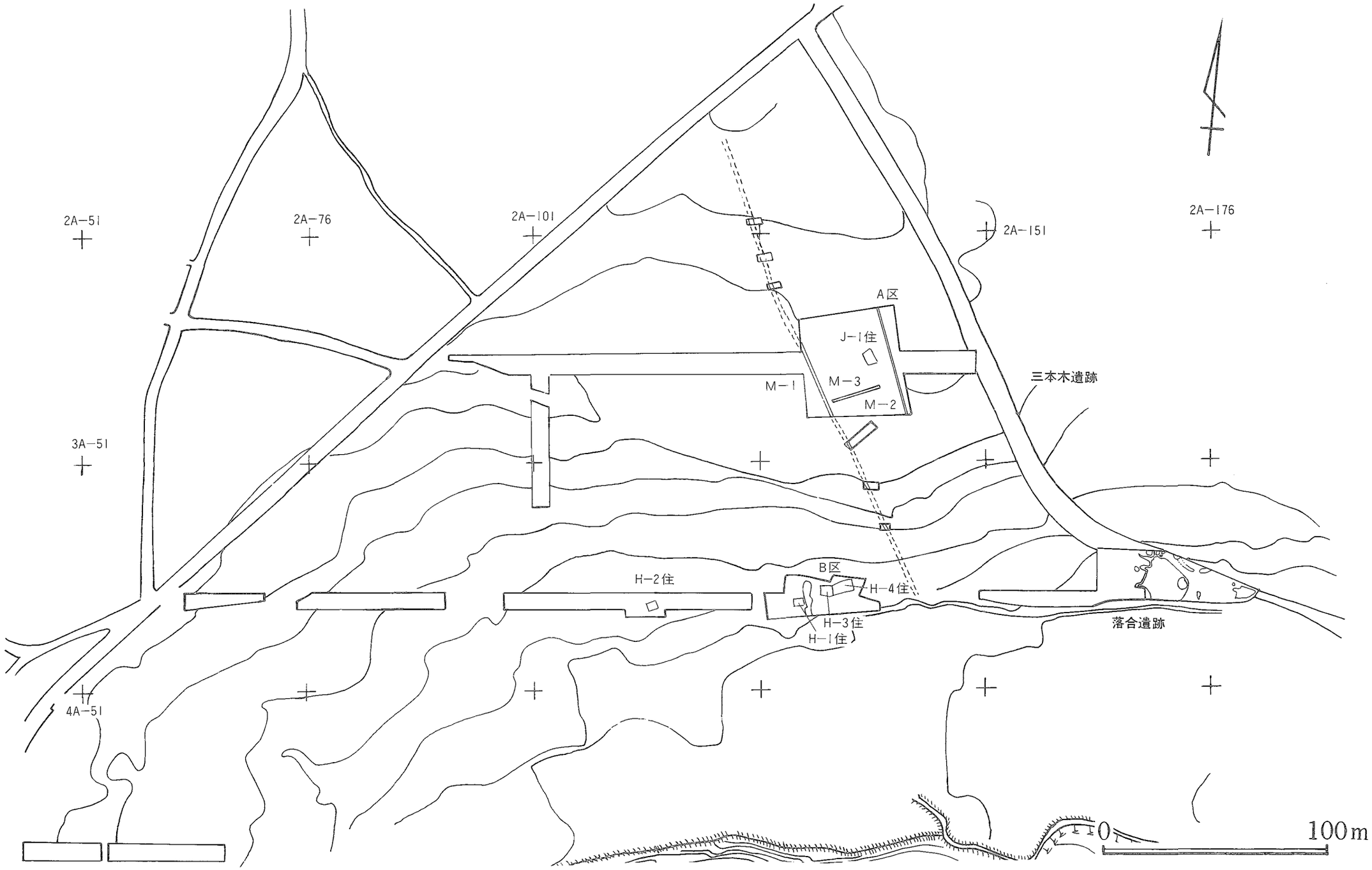
Ｊ－１号住居址（第6図）

住居址の諸属性は第1表のとおりである。

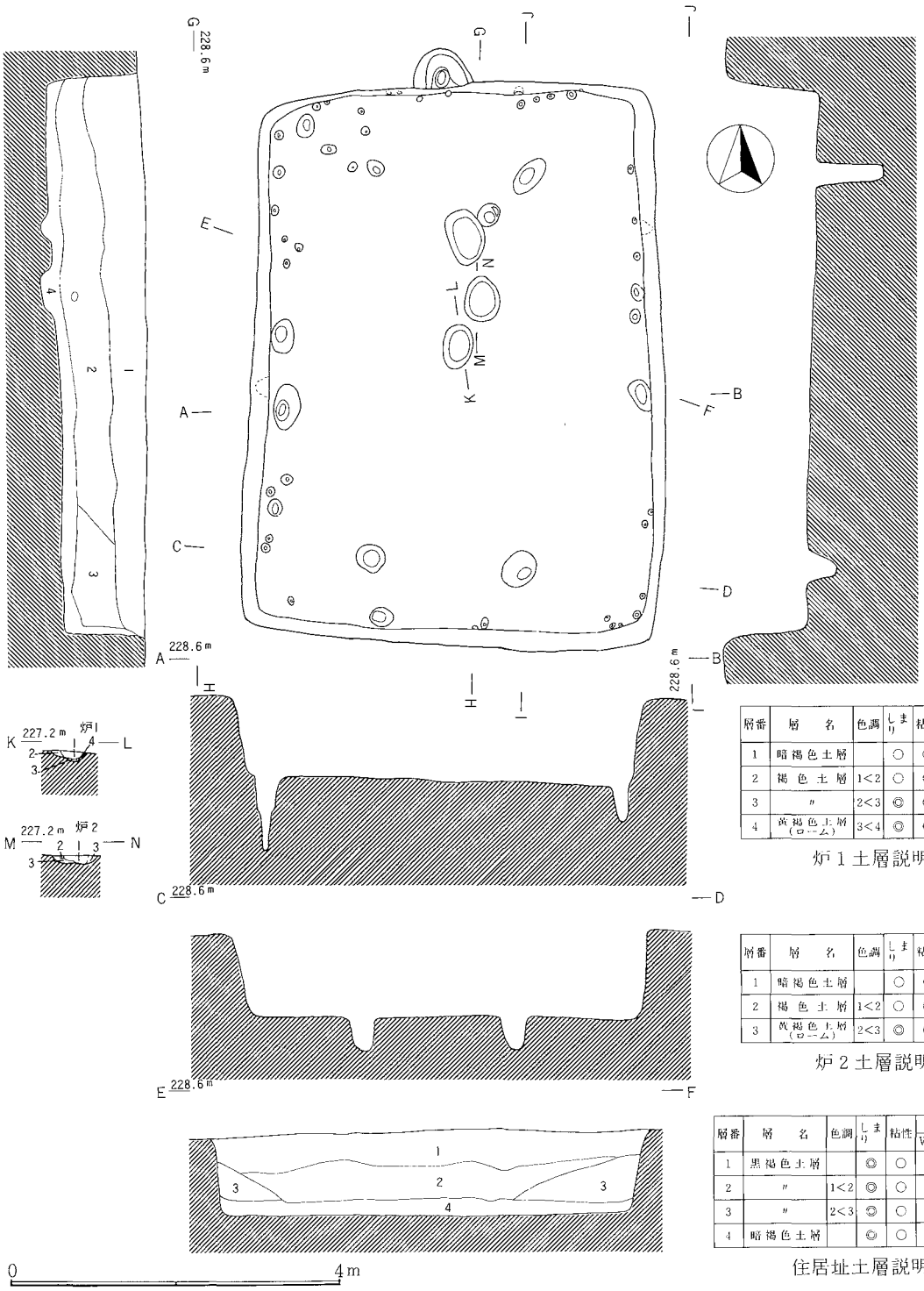
遺物の出土状況について留意される点を次に述べる。遺物は中層から下層にかけて多く検出された。下層の遺物のうち、比較的大きな同一母岩のチャート製の剝片Ａ類は住居南西からまとまって検出された。また、ピット中から磨石2点、凹石1点、棒状礫2点、リタッチド・フレイクＡ類1点、剝片Ａ類4点、土器片2点が検出された。

規模(m)	形　態	主柱穴	炉址の形態		炉の規模(cm)
6.9×5.0	長方形	6本	地床炉	炉1	55×36
				炉2	55×44

第1表　Ｊ－１号住居址諸元表



第5図　下塚田遺跡全体図



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	
					R・P	焼土
1	暗褐色土層		○	○	若干	△
2	褐色土層	1<2	○	○	△	
3	〃	2<3	◎	◎	△	
4	黄褐色土層（ローム）	3<4	◎	◎		

炉1土層説明

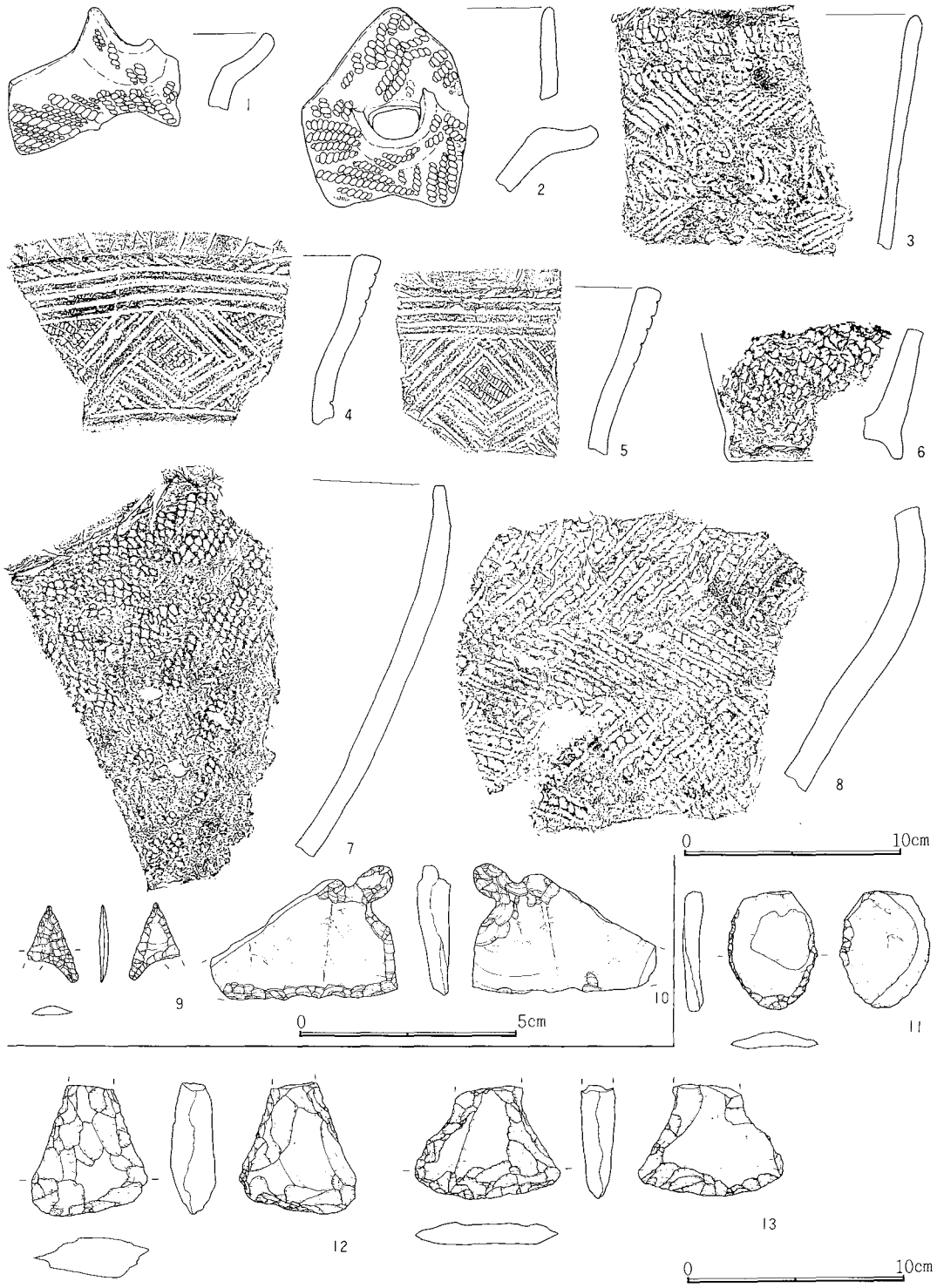
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	
					R・P	焼土
1	暗褐色土層		○	○	若干	△
2	褐色土層	1<2	○	○	若干	
3	黄褐色土層（ローム）	2<3	◎	◎		

炉2土層説明

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					W・P	Y・P	R・B
1	黒褐色土層		◎	○	△	△	
2	〃	1<2	◎	○	○	○	
3	〃	2<3	◎	○	○	○	△
4	暗褐色土層		◎	○	△	△	△

住居址土層説明

第6図　J－1号住居址実測図



第７図　J－１号住居址出土の遺物

Ｊ－１号住居址出土の遺物（第７図）

土　　器

１は片口土器の口縁部破片で、付加条と閉端環付き縄文が施されている。２は注口土器の口縁部破片で、注口の上の部分が山形波状に高くなっている。全体にに単節斜縄文が施されている。３は口縁部の破片で、口唇部に刻みをもつ。地文閉端環付きの羽状縄文を施し、胴部に半截竹管によるコンパス文が横位に廻らされている。４は口縁部破片で、地文に単節の斜縄文を残し、口縁下に３条の半截竹管による平行沈線、その下に３条の半截竹管による平行沈線により鋸歯状を描いている。５も４とは別個体であるが同様の文様構成である。６は底部破片で、上げ底である。全体に複節の斜縄文が施されている。７は口縁部破片で口縁端に小突起がつき、全体に単節斜縄文が施されている。８は胴部破片で、全体に付加条が交互に施されている。１～８までの土器すべて胎土に繊維を多く含んでいる。

	器　　種	上層	中層	下層	ピット	計
A類	石　鏃		1	1		2
	石　匙			1		1
	石　錐		1			1
	スクレイパーA類		2	2		4
	R・F・A類			1	1	2
B類	打製石斧			2		2
	スクレイパーB類	1	1	7		9
C類	磨　石	2	1	5	2	10
	凹　石			6	1	7
	台　石			2		2
	敲　石			1		1
	砥　石			2		2
	計	3	6	30	4	43

第２表　Ｊ－１号住居址石器組成表

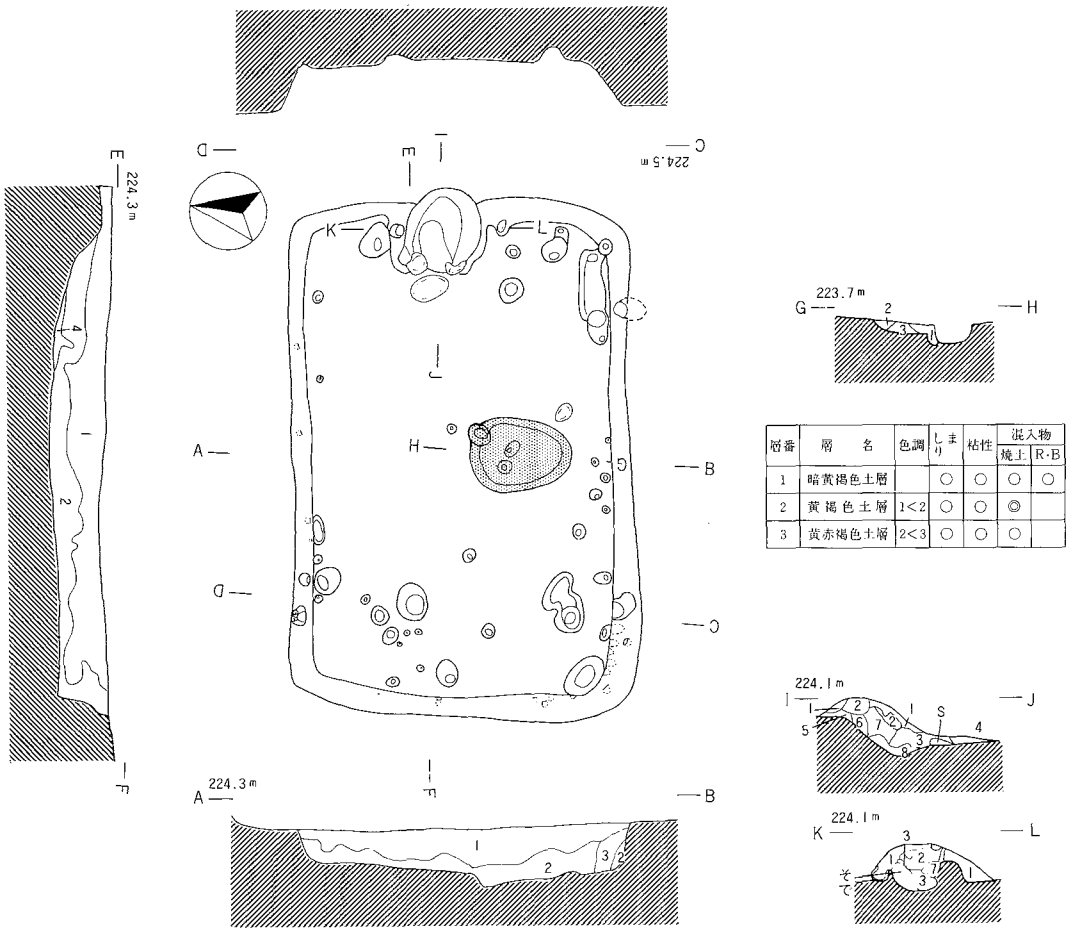
石　　器

この住居址から検出された石器は全部で146点である。ただし、礫は除外してある。狭義の石器は43点である。層位毎では、上層３点、中層６点、下層30点、ピット中４点である。石器の約80％は下層より検出されているので、この住居址に関連するものと考えられる。

検出された石器は第２表のとおりである。また、狭義の石器には含まれないが、明かに何らかの意図をもって搬入された結晶片岩製の棒状礫６点と礫６点が検出されている。

これらの石器のうち、石鏃は凹基無茎であり、黒曜石製である。また、打製石斧は小形の撥形である。そして、スクレイパーＢ類では片面加工のものが５点、両面加工のものが４点であり、片面加工のものが安定して存在している。こうした石器はこの段階の石器の特徴をよく示している。一方、Ｃ類では磨石10点、凹石７点とそれぞれの器種が均衡して存在しており、磨石と凹石が個別の器種であることを示していると推測される。

剥片ではＡ類65点、Ｂ類19点である。Ａ類では黒曜石49点、チャート13点、硬質頁岩３点であり、優先石材である黒曜石が75.3％を占めている。黒曜石が安定して供給されることは、縄文時代前期の特徴であり、この住居址からもこの傾向を示している。また、Ｂ類は在地の頁岩類が主体を占めている。



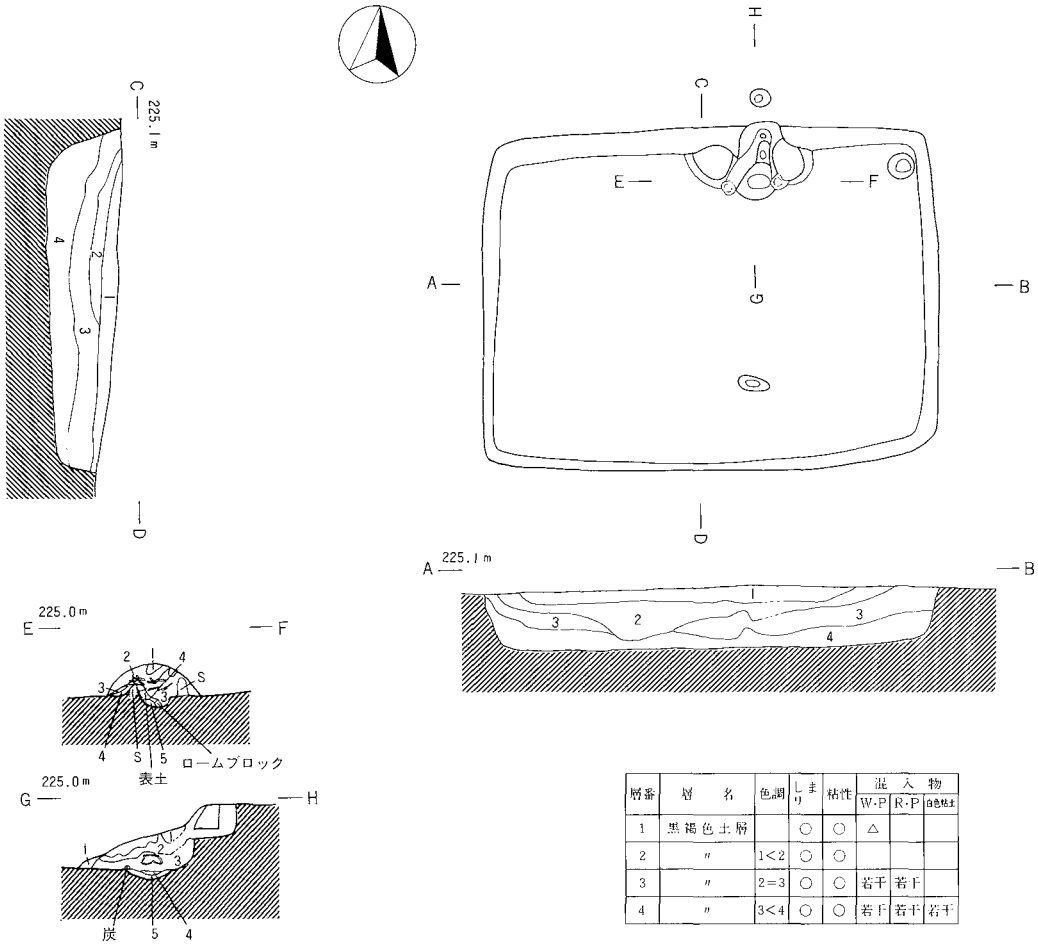
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 焼土	混入物 R・B
1	暗黄褐色土層		○	○	○	○
2	黄褐色土層	1<2	○	○	◎	
3	黄赤褐色土層	2<3	○	○	○	

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・P	備考
1	黒色土層		△	△	若干	
2	黒褐色土層	1<2	○	○	○	
3	暗黄褐色土層	2<3	△	○	◎	
4	〃	3=4	△	○	◎	

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 焼土	R・B	R・P	W・P	炭化物	鉄	Y・P	備考
1	暗褐色土層		△	△	△						若干	
2	黄赤褐色土層	1<2	○	◎	◎	◎						
3	暗赤褐色土層	2>3	○	○	◎		若干		△	○		
4	暗褐色土層	3>4	○	○			若干		若干			遺物を混入
5	〃	1<5	○	○	△			若干				
6	暗赤褐色土層	2>6	△	△	○	若干						
7	赤褐色土層	2<7	○	○	◎	若干						
8	暗褐色土層	6>8	○	○	△	若干			△	◎		

0 4m

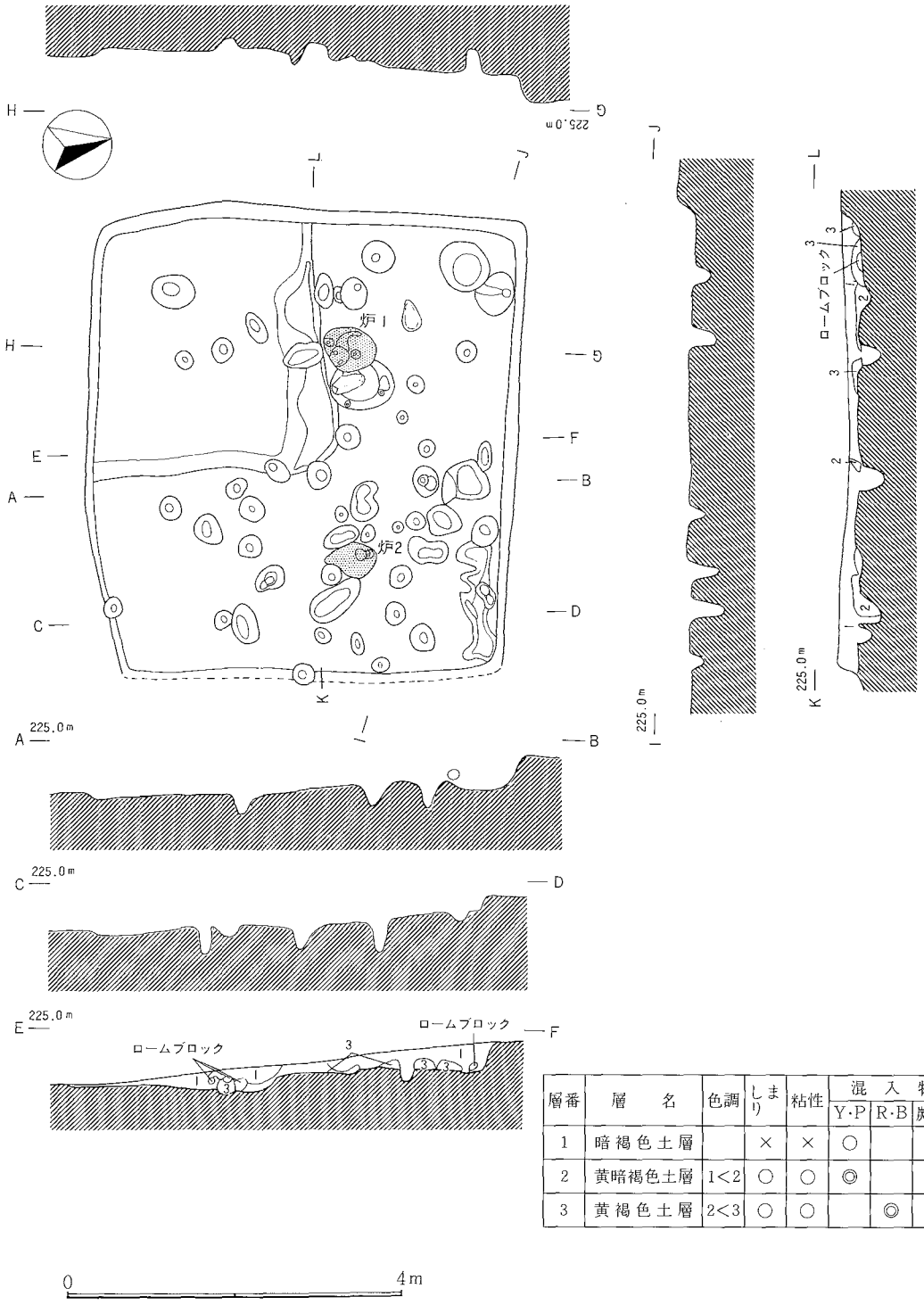
第8図　H－1号住居址実測図



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	混入物 白色粘土
1	黒褐色土層		○	○	△		
2	〃	1<2	○	○			
3	〃	2=3	○	○	若干	若干	
4	〃	3<4	○	○	若干	若干	若干

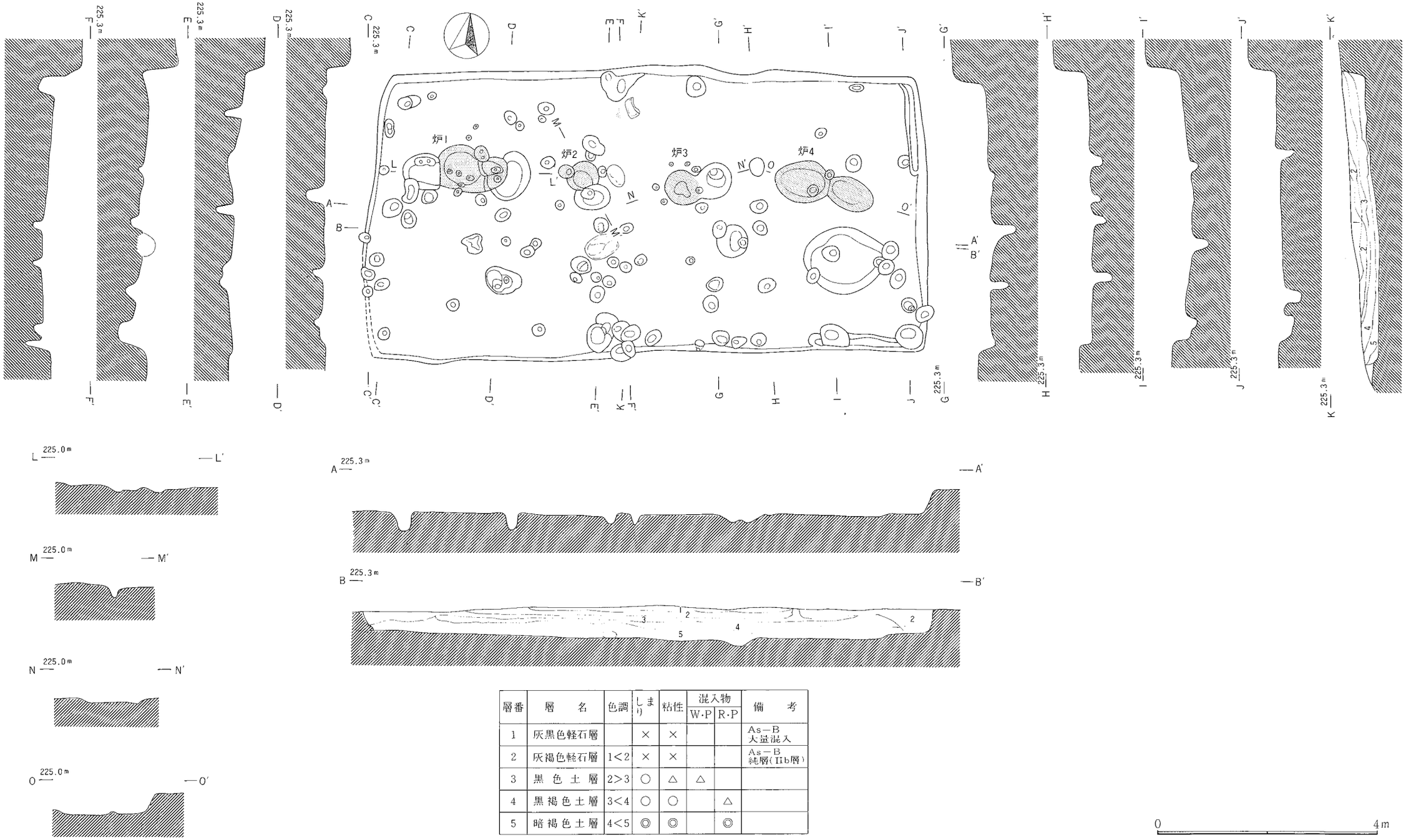
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 白色粘土	混入物 焼土	混入物 R・P	混入物 炭化物	備考
1	暗灰褐色土層		○	◎	◎	○		若干	
2	灰黒褐色土層	1>2	○	○	若干	若干	若干		
3	暗褐色土層	2>3	○	○	若干	△	若干	○(底面)	礫を混入
4	赤褐色土層		○	○		◎			
5	暗黄赤褐色土層	4>5	○	○		若干			

第9図　H－2号住居址実測図



層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					Y·P	R·B	炭化物
1	暗褐色土層		×	×	○		
2	黄暗褐色土層	1<2	○	○	◎		◎
3	黄褐色土層	2<3	○	○		◎	

第10図　H－3号住居址実測図



層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	備　考
1	灰黒色軽石層		×	×			As－B 大量混入
2	灰褐色軽石層	1＜2	×	×			As－B 純層(IIb層)
3	黒色土層	2＞3	○	△	△		
4	黒褐色土層	3＜4	○	○		△	
5	暗褐色土層	4＜5	◎	◎		◎	

第11図　H－4号住居址実測図

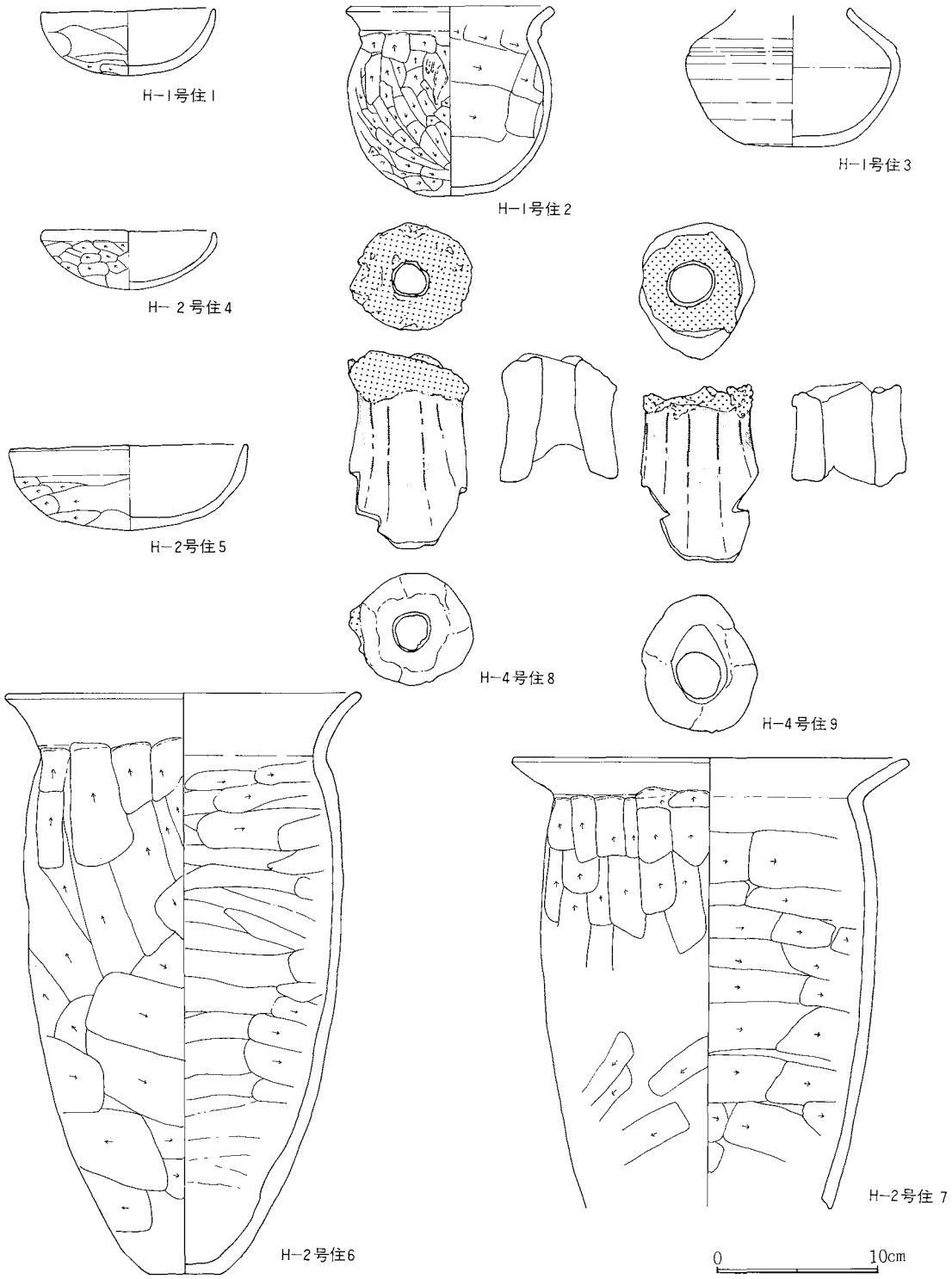
住居址	規模(m)	竈位置	竈の構造・構材	炉の規模(cm)	炉の構造
H－1号	5.2×3.5	東	両袖の芯及び天井部は石を使用し、ロームを混入する暗褐色土で固める。	110×80	楕円形の地床炉で台石を南東部に有し、北東部には1ヶ所ピットが存在する。底面に2ヶ所小ピットがある。
住居構造	柱穴の数が通常の住居址に比べて多く、柱穴は直立するものの他に、側壁部分に斜めに存在するものがある。炉は中央南部に存在する。				
遺物出土状況	竈の前面や北側を中心に、小形甕、杯、深鉢などが検出された。また、炉の内部と周囲からは炭化材と鉄さいが多量検出された。				
特記事項	この遺跡で鍛冶を行った住居址で最古のものである。				

住居址	規模(m)	竈位置	竈の構造・構材	炉の規模	炉の構造
H－2号	4.5×3.2	北	両袖の芯材に石を使用し、ロームを混入する暗褐色土で固める。	——	——
住居構造	通常の住居形態で特別な施設は確認されていない。				
遺物出土状況	竈に甕がかけられた状態で検出された。竈前面を中心に炭化材が検出された。鉄さいは住居址全面から散乱した状態で検出された。				

住居址	規模(m)		炉の規模(cm)	炉の構造
H－3号	5.0×5.3	炉1	80×65	円形の地床炉で台石を東側に有し、底面に小ピットが4ヶ所存在する。
		炉2	60×40	円形の地床炉で周囲に3ヶ所ピットが存在する。
住居構造	住居の南西部分が一段低くなっている。ピットがたくさん存在し主柱穴を特定することはできない。炉は2基東西に並んで中央部分に存在する。			
遺物出土状況	住居址全体から鉄さいと炭化材が多量検出された。土器はほとんど検出されなかった。			
特記事項	覆土にはAs－Bは含まれておらず、H－4号住居址に切られている。			

住居址	規模(m)		炉の規模(cm)	炉の構造
H－4号	6.8×4.9	炉1	90×85	円形の地床炉で周囲にピットが数カ所存在する。底面に小ピットが4ヶ所存在する。
		炉2	60×55	円形の地床炉で周囲に対角線状にピットが4ヶ所配列する。
		炉3	65×60	円形の地床炉で周囲に小ピットが7ヶ所馬蹄形に配列する。
		炉4	100×75	楕円形の地床炉で東側に1ヶ所ピットが存在する。底面に1ヶ所ピットが存在する。
住居構造	As－Bが覆土2層目を長方形に覆っていることから、最後は長方形を呈する大規模な工房となっているが、中央部分に不連続な箇所が存在することから、当初はH－3同様正方形を呈する形態であったとみられる。接続部分にはピットが南北方向に多数存在する。主柱穴とみられる比較的大きなピットのほか、多数の小ピットが存在する。炉は中央北寄りに等間隔に配置されている。			
遺物出土状況	住居全体から鉄さいと炭化材が検出されたほか、羽口の破片が多数検出された。土器類はまったく検出されなかった。鉄さいの形状は湾状さいである。			
特記事項	住居を拡張しているので、長期間存在したとみられる。この遺跡では最も新しい。			

第3表　古墳時代～平安時代の住居址諸元表



第12図　古墳時代～奈良・平安時代の遺物

No.	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎　土	色　調	残　存	備　考
1	土師器 杯	器高：4.1 口径：10.8	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細石粒を含む	赤褐色	3/5	口縁部にスス付着
2	土師器 甕	器高：11.7 口径：12.2 底径：4.2	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	細石粒を少量含む	〃	完形	内面にスス付着
3	須恵器 長頸壺	器高：8.6 底径：5.8	外面内面共に強い横ナデ。	〃	灰色	肩部～底部3/5	
4	土師器 杯	器高：3.7 口径：10.5	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	赤褐色	5/6	磨滅が著しい
5	土師器 杯	器高：5.3 口径：14.8	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	赤褐色	3/5	
6	土師器 長胴甕	器高：27.5 口径：24.2	外面：口縁部横ナデ、胴上部縦、胴下部横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	〃	赤褐色	口縁部～胴下部4/5	胴上部にスス付着
7	土師器 長胴甕	器高：35.5 口径：21.8 底径：4.4	外面：口縁部横ナデ、胴上部縦、胴下部横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	〃	赤褐色	ほぼ完形	胴上部にスス付着

No.	器　種	特　　徴
8	羽　口	土製品。側面一部欠損。酸化焔焼成で胎土には砂粒を多く含む。ほぼ円形をなし、先端部は斜めとなっており、基部は内湾している。長さ12cm、径6.6cm、口径2.5cmである。先端部は全面がガラス質状に溶出し発泡している。先端部から1cm～4cmは側面が2次火熱により還元状態となっており、黒灰色をなしている。
9	羽　口	土製品。先端部、側面一部欠損。酸化焔焼成で胎土には砂粒を多く含む。ほぼ円形をなし、基部は内湾している。長さ8cm、径6.6cm、口径3.1cmである。先端部はガラス質状に溶出し発泡している。先端部から1cm～4cmは側面が2次火熱により還元状態となっており、黒灰色をなしている。

第4表　古墳時代～奈良・平安時代の遺物観察表

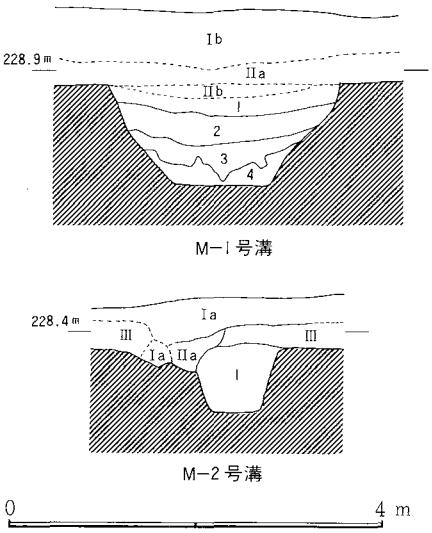
(3) 古墳時代～奈良・平安時代の遺構と遺物

住居址（第８図～第12図）

各住居址については、第３表のとおりである。Ｈ－１号住居址は７世紀後半、Ｈ－２号住居址は８世紀前半、Ｈ－４号住居址は11世紀以前、Ｈ－３号住居址はＨ－４号住居址以前の時期のものである。したがって、この場所で継続的に鍛冶が行われていたことがわかる。このうち、竈を有さないＨ－３、Ｈ－４号住居址は住居とするよりも鍛冶工房址と考えた方が妥当である。

溝（第13図）

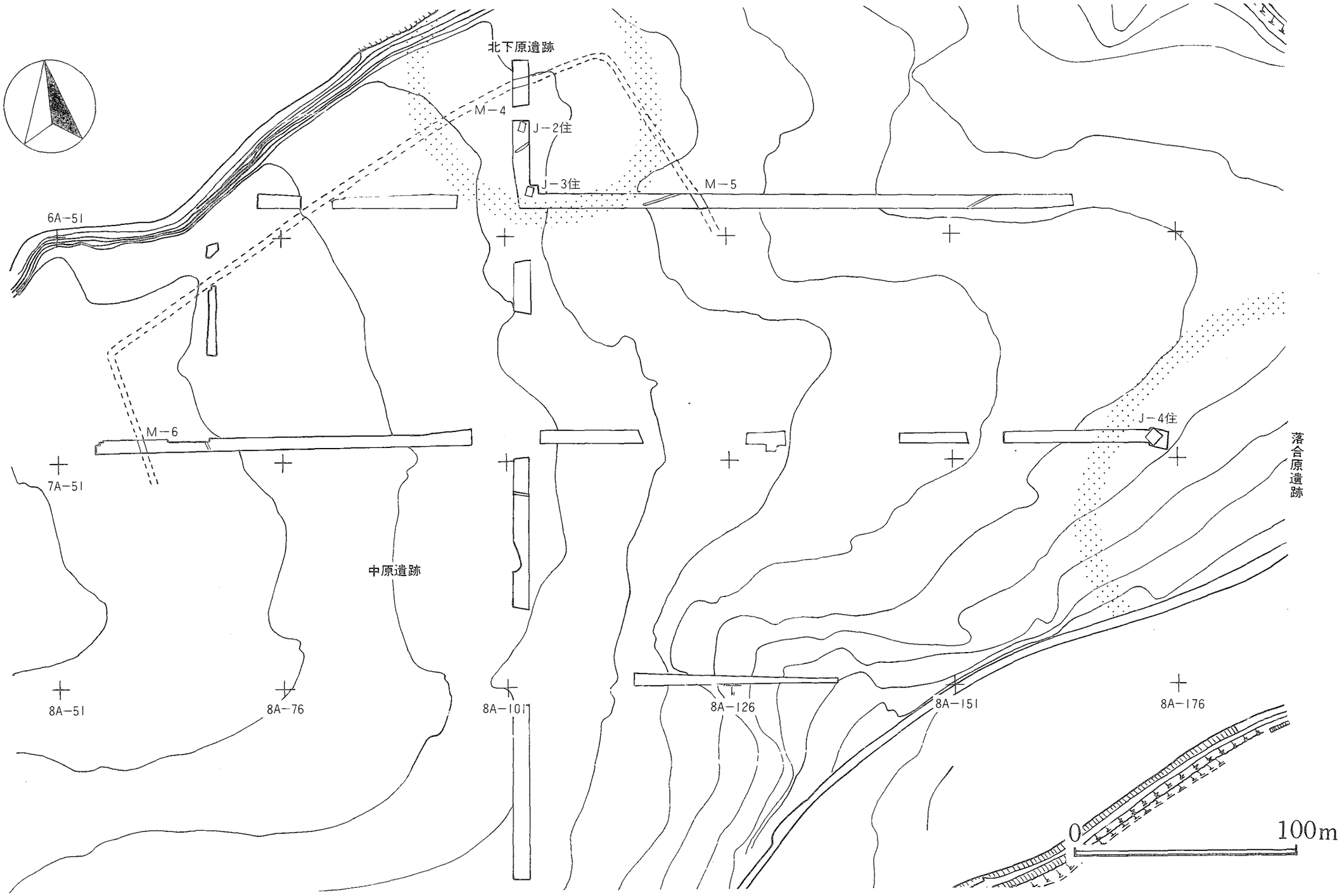
Ｍ－１号溝は上幅2.5m、下幅1.0m、深さ1.1mの逆台形状を呈する。覆土上層にはA_s－Ｂが純層で堆積している。台地を南北に区画するように造られており、延長150m以上にわたっている。また、Ｍ－２号溝は上幅0.9m、下幅0.5m、深さ0.7mの逆台形状を呈し、Ｍ－１号溝の東33mの位置をこれに平行して南北に延びている。また、Ｍ－３号溝も同様な形態で、これら２本の溝の間を結んでほぼ直行している。



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					Y·P	W·P	R·P
1	黒褐色土層		○	○	若干		
2	〃	1<2	○	○	若干		
3	暗黄褐色土層	2<3	○	○	△		
4	黄褐色土層	3<4	○	○	◎		

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					Y·P	W·P	R·P
1	黒褐色土層	III>1	○	○		若干	若干

第13図　Ｍ－１号溝・Ｍ－２号溝土層断面図



第14図　北下原遺跡・落合原遺跡全体図

2　北下原遺跡

(1)　遺跡の概要（第14図）

この遺跡は縄文時代前期前半期の集落遺跡である。住居址が２軒検出されている。また、この遺跡の範囲には３条の大規模な溝状遺構が存在するが、これは中原遺跡で存在が確認された牧の放牧場を囲む大溝の一部と推定されるので、遺跡としては分離して扱うことにする。

北下原遺跡からはそのほかに、縄文時代前期後半から中期、後期にかけての遺物集中部分が数カ所確認された。

(2)　縄文時代の遺構と遺物

Ｊ－２号住居址（第15図）

住居址の諸属性は第５表のとおりである。また、土層の堆積状況をみると、中位に不連続な面が存在しているので、この住居址は廃絶後二次的に利用されていると推定される。遺物はこの面の上層と下層から検出されている。炉石には偏平な結晶片岩が用いられている。また、磨石が炉石として利用されている。

Ｊ－２号住居址出土の遺物（第16図）

土　　器

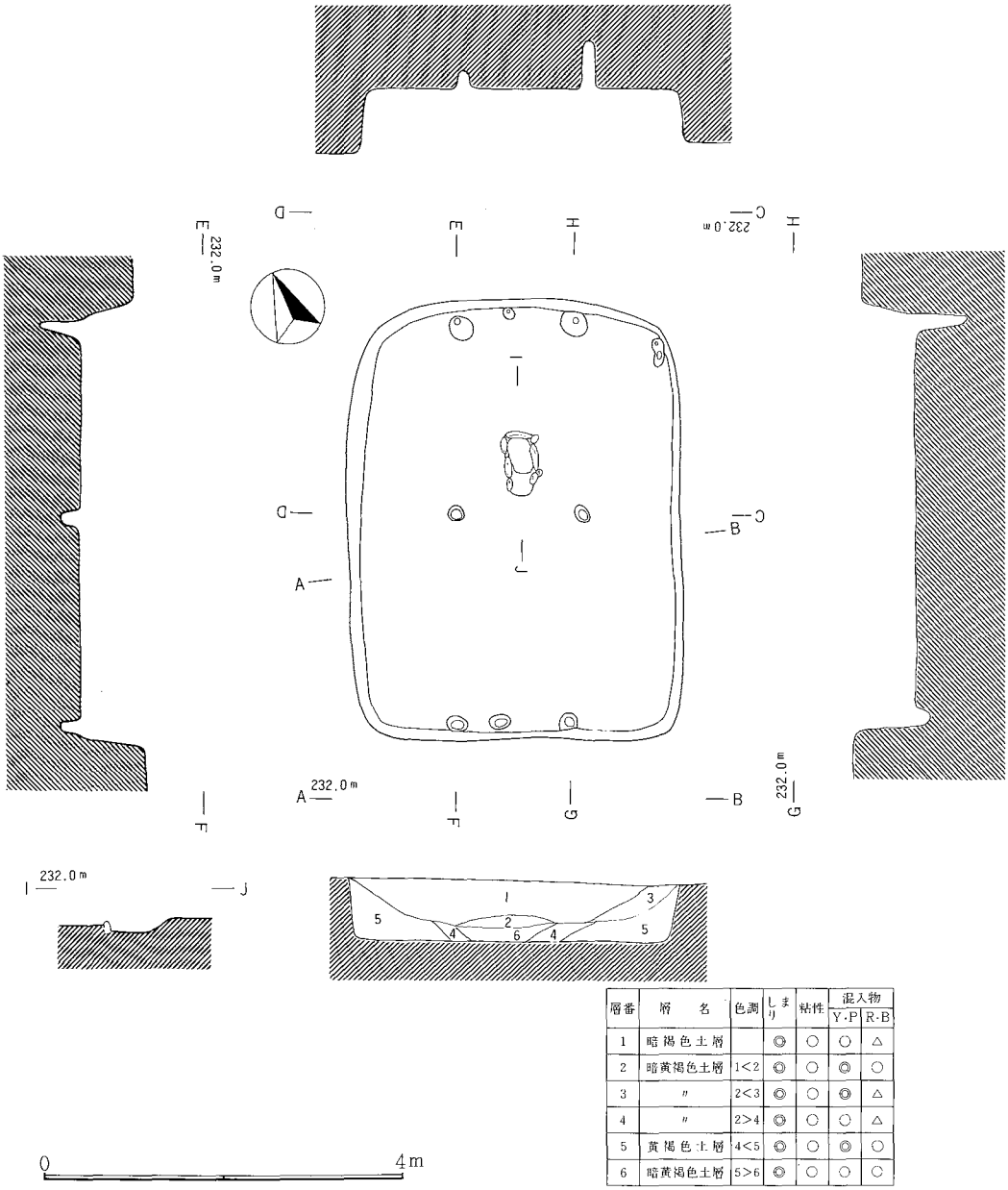
１は口縁部～胴部の破片である。口縁は波状口縁であり、口縁端に粘土粒が張り付けられている。全体に組紐文が施され、櫛歯状工具による縦長のコンパス文が横位に廻らされている。２は胴部の破片で、全体に組紐文を施し、３条の半截竹管による平行沈線が鋸歯状に横位に廻らされている。３は胴部の破片で、地文に単節の斜縄文を施し、半截竹管による平行沈線、その下に粘土粒が張り付けられている。４は口縁部破片で、口縁端に小突起をもち、全体に単節の斜縄文が施されている。５は胴部破片で、地文に組紐文を施し、３条の半截竹管による平行沈線が鋸歯状および曲線的に施文されてい

規模(m)	形　態	主柱穴	炉址の形態	炉の規模(cm)
4.5×3.3	長方形	６本	石囲炉	70×40

第５表　Ｊ－２号住居址諸元表

	器　　種	上層	下層	不明	計
A類	石　鏃			2	2
	石　匙	1			1
	石　槍	1			1
	スクレイパーA類	1		1	2
B類	スクレイパーB類	1			1
C類	磨　石	1	4	3	8
	凹石	1	5		6
	石　皿		1	1	2
	計	6	10	7	23

第６表　Ｊ－２号住居址石器組成表



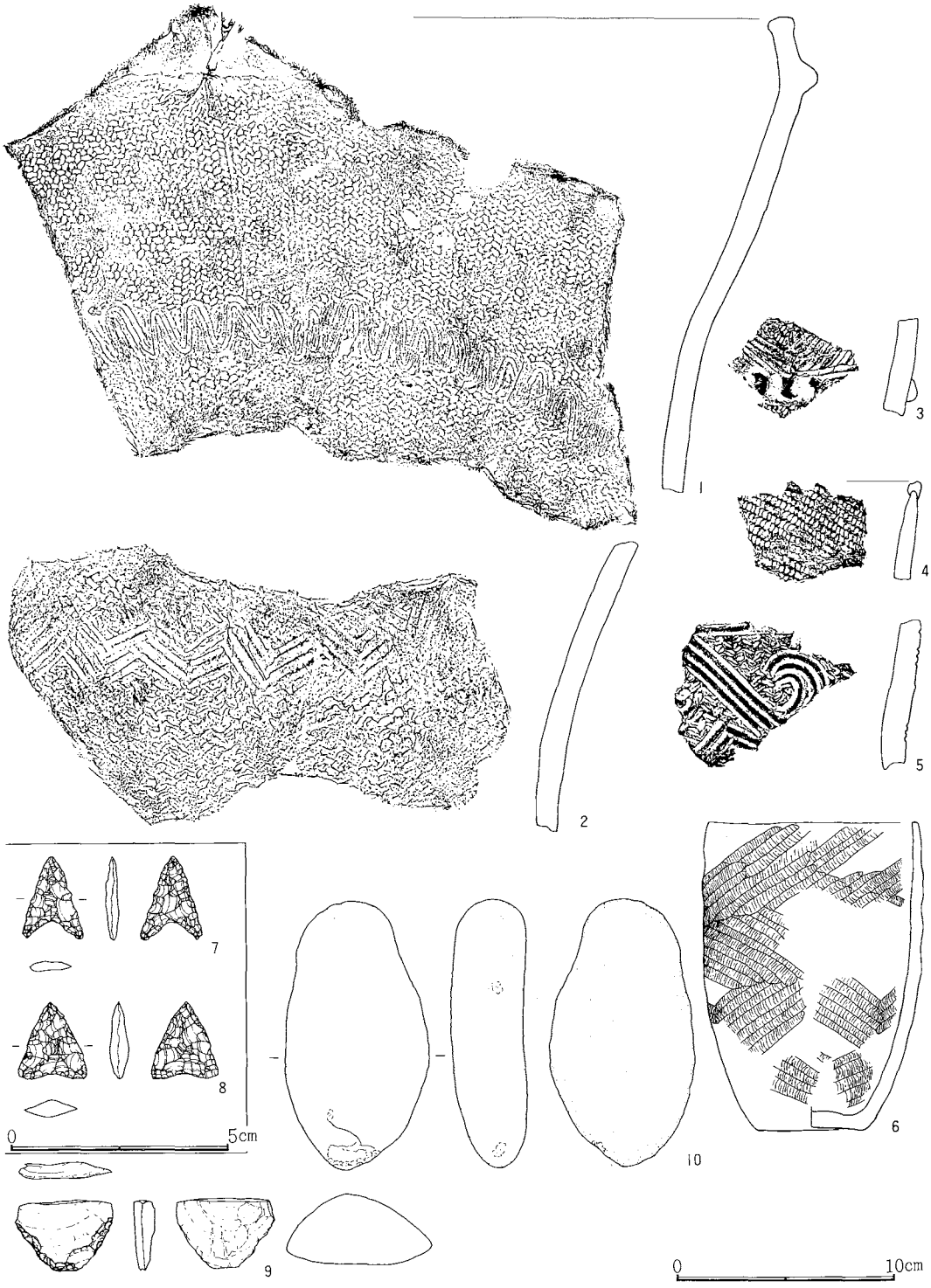
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 Y・P	混入物 R・B
1	暗褐色土層		◎	○	○	△
2	暗黄褐色土層	1<2	◎	○	◎	○
3	〃	2<3	◎	○	◎	△
4	〃	2>4	◎	○	○	△
5	黄褐色土層	4<5	◎	○	◎	○
6	暗黄褐色土層	5>6	◎	○	○	○

第15図　J－2号住居址実測図

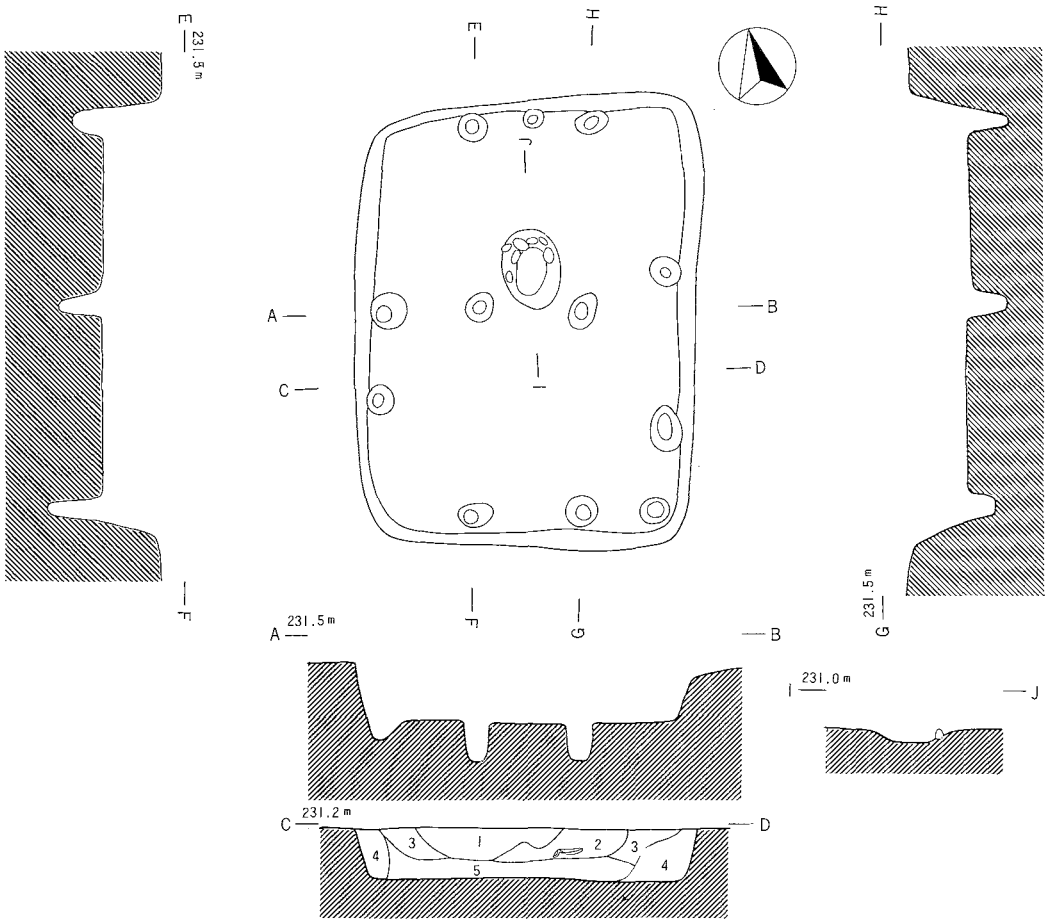
る。6は小型の深鉢土器で、全体に無節の斜縄文で菱形羽状を表出している。1～6までの土器すべて胎土に繊維を多く含んでいる。

石　器

この住居址からは出土した石器は全部で59点である。狭義の石器はこのうち23点である。また、このほかに結晶片岩製の小形棒状礫と結晶片岩の破片が検出されている。狭義の石器は第6表の



第16図　J－2号住居址出土の遺物



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	Y・P	炭化物	R・B	備考
1	暗褐色土層		◎	○	△	○	△		
2	暗赤褐色土層	1>2	◎	○	△	○	△		土器を多量含む。
3	暗黄褐色土層	2<3	◎	○	△	○	△		
4	暗褐色土層	1<4	◎	○	△	○	△		
5	黄褐色土層	4<5	◎	○	△	○	△	○	

第17図　J－3号住居址実測図

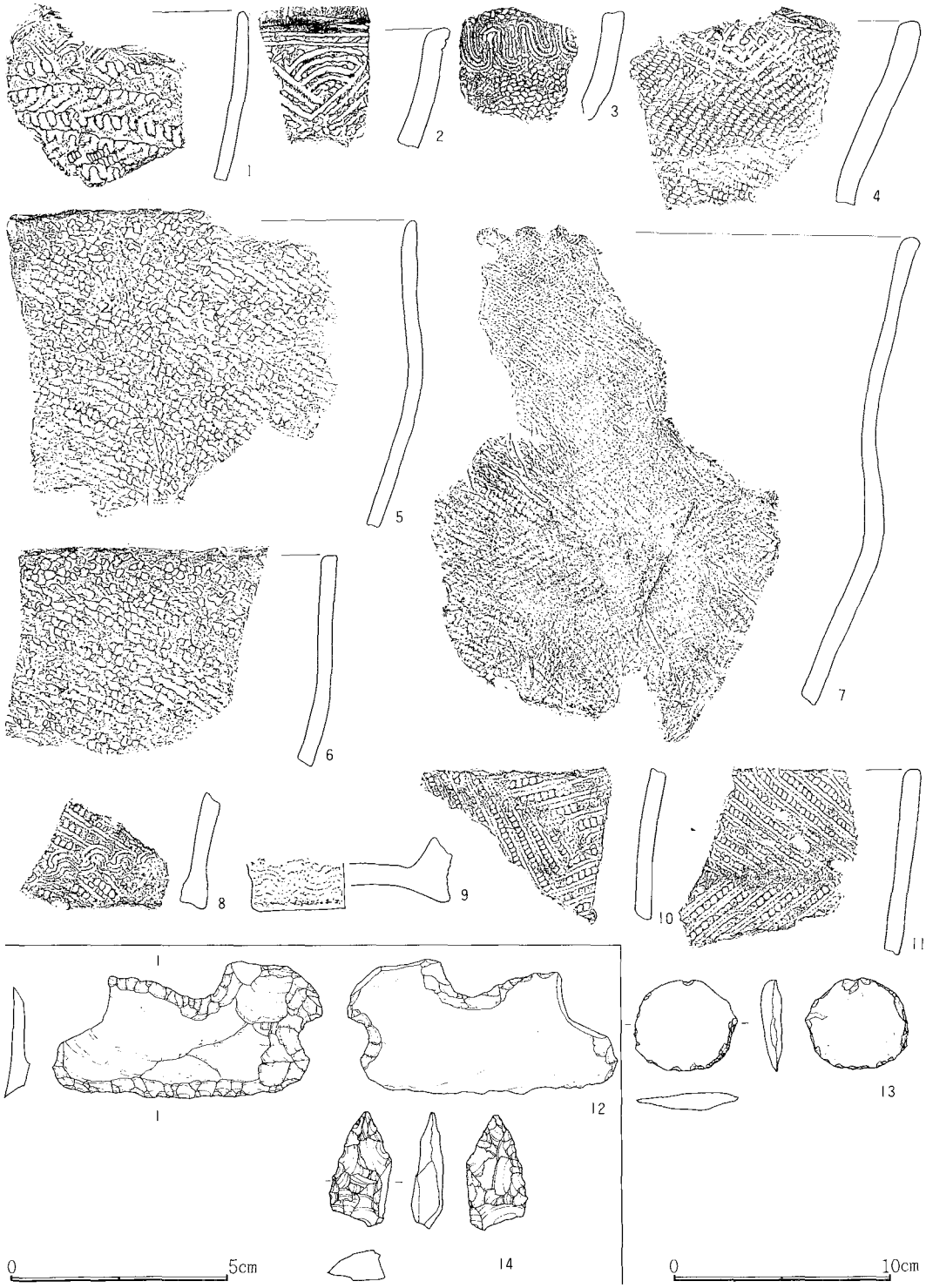
とおりである。

J－3号住居址（第17図）

住居址の規模等は第7表のとおりである。遺物の出土状態をみると、上層と下層から遺物が検出されており、土器群からも二つに分かれる。石器の出土状況も上下に二分される。したがって、この住居址には二次的に遺物が廃棄されたものと推定される。この住居址のピットの中から土器片1点、剝片A類4点、結晶片岩製の礫2点が検出された。炉は円礫による石囲炉である。

規模(m)	形　態	主柱穴	炉址の形態	炉の規模(cm)
4.7×3.3	長方形	10	石囲炉	85×60

第7表　J－3号住居址諸元表



第18図　J－3号住居址出土の遺物

Ｊ－３号住居址出土の遺物（第18図）

土　　器

１は口縁部破片で、口縁端に小突起をもち、その下に平行沈線で文様を描く。全体に閉端環付の羽状縄文が施されている。２は口縁部破片で、地文に単節の斜縄文を残し、半截竹管の平行沈線により、直線的、曲線的な文様を描いている。３は胴部破片で、単節斜縄文を施し、２条の半截竹管によるコンパス文が横位に廻らされている。４は口縁部破片で、全体に単節の羽状縄文を施し、口縁下に半截竹管で押しびきによる沈線が斜位に施されている。５は口縁部破片で、全体に複節の斜縄文が施されている。６は口縁部破片で、全体に複節の斜縄文が施されている。７は口縁部～胴部の破片で、口縁端に小突起をもち、口縁下に結節回転が施されている。胴部には単節の羽状縄文が施されている。８は底部破片で上げ底である。全体に直前段合撚の縄文を施し、２条の半截竹管によるコンパス文が横位に廻らされている。９も底部破片で上げ底である。２条の半截竹管によりコンパス文が横位に廻らされている。10、11は胴部破片で、直前段合撚による羽状縄文が施されている。１～11までの土器すべて胎土に繊維を多く含んでいる。

石　　器

この住居址から検出された石器は全部で121点である。この中で、狭義の石器は32点であり、次のとおりである。それぞれの器種が上層と下層から二分して検出されていることがわかる。

このほかに、この住居址からも結晶片岩製の小形棒状礫と破片がそれぞれ２点検出されている。

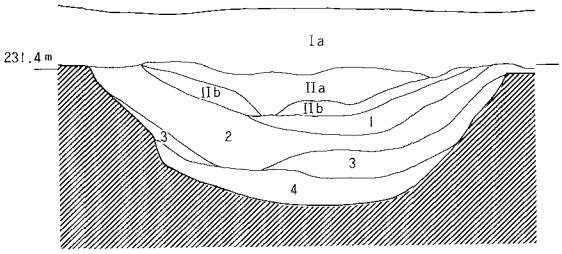
	器　　種	上層	下層	ピット	不明	計
A類	石　鏃		1			1
	スクレイパーA類	1	2			3
B類	打製石斧	1	2			3
	スクレイパーB類	2	4		1	7
C類	磨　石		1		2	3
	凹　石	8	4			12
	台　石				2	2
	砥　石		1			1
	計	12	15		5	32

第８表　Ｊ－３号住居址石器組成表

(3) 奈良・平安時代の遺構

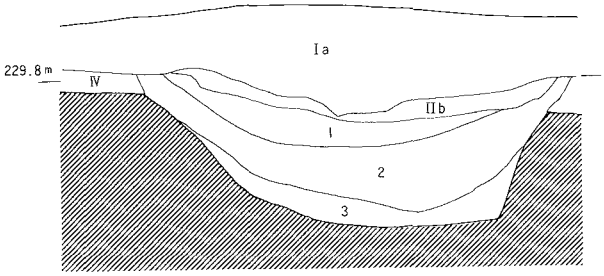
この時代の遺構としては、大規模な溝が3条検出されている。これらの溝は中原遺跡で検出された牧の施設の一部と推定される。今回の報告では、溝の断面図のみを図示した（第19図）。

M－4、M－5号溝は溝に直行した断面図ではないので、幅広になっており、M－6号溝がこの溝の形状を示している。上幅2.6m、下幅1.0m、深さ1.3mの逆台形状を呈している。上層にはAs－Bが純層で堆積している。



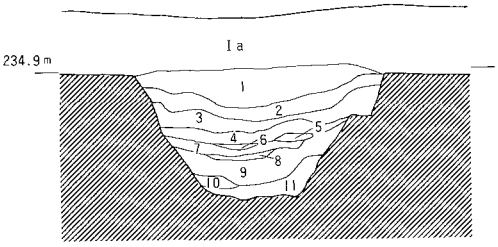
M−4号溝

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 Y・P	混入物 R・B	備考
1	黒褐色土層		○	○			
2	褐色土層	1<2	○	○			
3	暗褐色土層	2>3	○	○	△		
4	〃	3<4	○	○	△	△	



M−5号溝

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 Y・P	混入物 R・B	備考
1	黒褐色土層		○	○	△		
2	暗褐色土層	1<2	○	○	○		
3	褐色土層	2<3	○	○	○	○	



M−6号溝

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	備考
1	黒褐色土層		○	○	△	若干	
2	暗褐色土層	1<2	○	○	△	△(1より多い)	
3	黒褐色土層	2>3	○	○	○	○	
4	暗褐色土層	3=4	○	○	○(3より多い)	△(3より少ない)	
5	黒褐色土層	4>5	○	○	若干	△	
6	灰黒褐色土層	3<6	○	×	△	△	砂質
7	黒褐色土層	5<7	○	○	△	△	
8	灰黒褐色土層	7<8	○	×	若干	若干	砂質
9	黒褐色土層	7<9	○	○	○	○	
10	〃	9=10	○	○	△	△	
11	暗褐色土層	10<11	○	○	△	◎	

0 ―――― 4 m

第19図　M－4号溝・M－5号溝・M－6号溝土層断面図

3　落合原遺跡

(1)　遺跡の概要

この遺跡は縄文時代前期前半期の集落遺跡であるとみられる。今回の調査で検出された遺構としては、住居址１軒がある。遺跡の範囲はさらに東へ延びていると推定される。

(2)　縄文時代の遺構と遺物

Ｊ－４号住居址（第20図）

この住居址の諸属性は、第９表のとおりである。この住居址の周囲には段と周溝が存在するので、拡張したものと推定される。

規模(m)	形　態	主柱穴	炉址の形態	炉の規模(cm)
9.5×4.9	長方形	不明	石囲炉	65×50

第９表　Ｊ－４号住居址諸元表

Ｊ－４号住居址出土の遺物（第21図）

土　　器

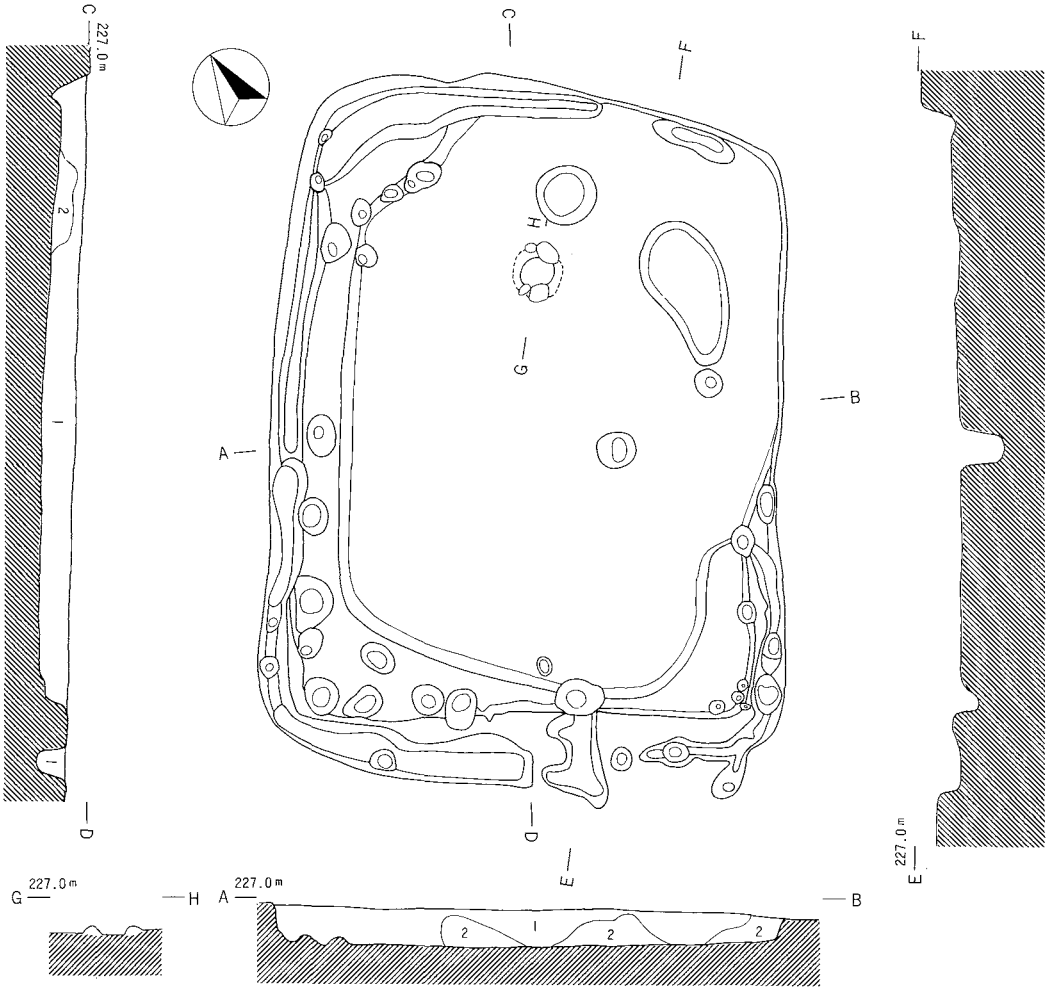
１は胴部破片で、無節の斜縄文が施されている。２は胴部破片で、単節の斜縄文が施されている。３は胴部破片で、無節の斜縄文が施されている。

石　　器

この住居址からは91点の石器が検出された。このうち、狭義の石器は29点である。器種組成は次のとおりである。石鏃以外はほとんどの器種が存在しており、この段階の器種組成の様相を示していると考えられる。打製石斧は撥形を呈するものである。また、スクレイパーＢ類は、大形のものと小形のものが存在し、いずれにも片面加工のものと両面加工のものが存在する。

	器　　種	計
Ａ類	石　　匙	2
	ピエス・エスキーユ	1
	Ｒ・Ｆ・Ａ類	2
Ｂ類	打製石斧	4
	スクレイパーＢ類	8
Ｃ類	磨　　石	3
	凹　　石	6
	台　　石	1
	敲　　石	1
	砥　　石	1
	計	29

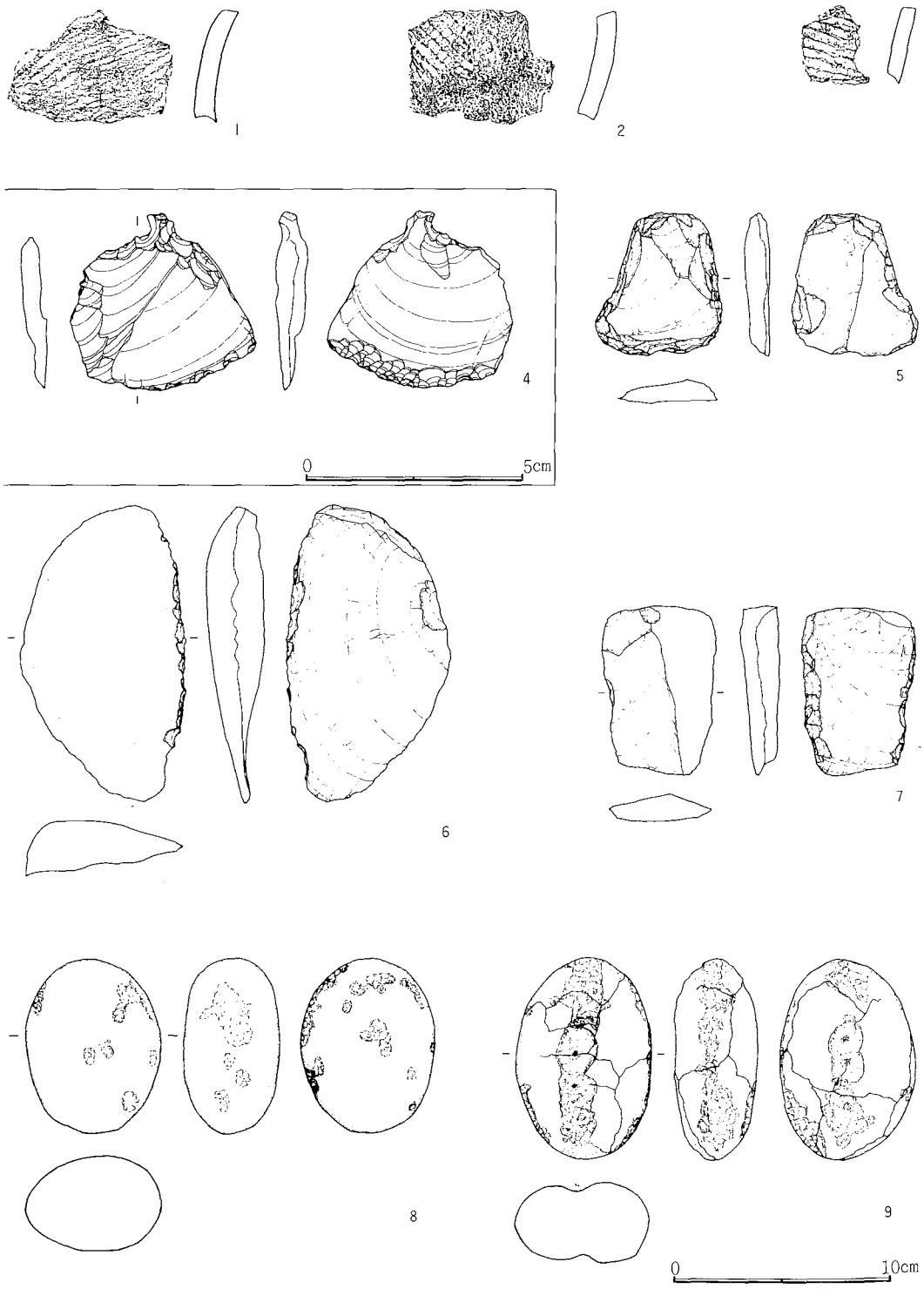
第10表　Ｊ－４号住居址石器組成表



層番	層　名	しまり	粘性	混入物		
				W·P	Y·P	R·B
1	暗褐色土層	◎	○	△	○	
2	褐色土層	△	○		△	○

0　4m

第20図　J－4 号住居址実測図



第21図　J－4号住居址出土の遺物

VI 成果と問題点

1 縄文時代前期前半の土器群について

今回の調査により検出された縄文時代の土器は、そのほとんどが縄文時代前期前半に属するものであった。先に遺構ごとにに土器を示してきたが、ここではそれらの土器を、形態、文様構成、地文などの観点から類系化を試みたいと思う。おおよそⅠ～Ⅳの4段階に区分することができる。

Ⅰ 段 階（第7図3、第18図1等）

口縁部～胴部にかけてループ文が施文されているものを主体としている。口縁に刺突をもつもの、胴部に半截竹管によるコンパス文を施文するものも見られる。器形は平口口縁で、小突起をもつものもある。口唇部の形態は丸棒状を呈する。

本段階は、関山Ⅰ式期に比定されると思われる。

Ⅱ 段 階（第7図4・5、第18図2等）

地文に単節の斜縄文を残し、口縁部に半截竹管による平行沈線、鋸歯状文が施文されるものを主体とする。胴部にループ文を施文されているものもある。器形は平口口縁で、口唇部の形態は角頭状を呈する。

本段階もⅠ段階同様、関山Ⅰ式期に比定されると思われる。

Ⅲ 段 階（第16図1～3・5、第18図3等）

地文は組紐で、口縁端に粘土粒の貼付文、胴部に櫛歯状の工具による縦長のコンパス文や、半截竹管による鋸歯状の平行沈線文が施文される。器形は波状口縁で、口唇部の形態は角頭状を呈する。

本段階は関山Ⅱ式期に比定されると思われる。

Ⅳ 段 階（第7図6・8、第16図6、第18図4・5・7～11等）

器面全体に縄文を施文するものが主体となる。縄文は単節無節があり、羽状あるいは菱形状に施文されている。コンパス文を施文されているものもある。器形は平口縁、波状口縁があり、口唇部の形態は、角頭状、丸棒状を呈する。

本段階は黒浜式器に比定されると思われる。

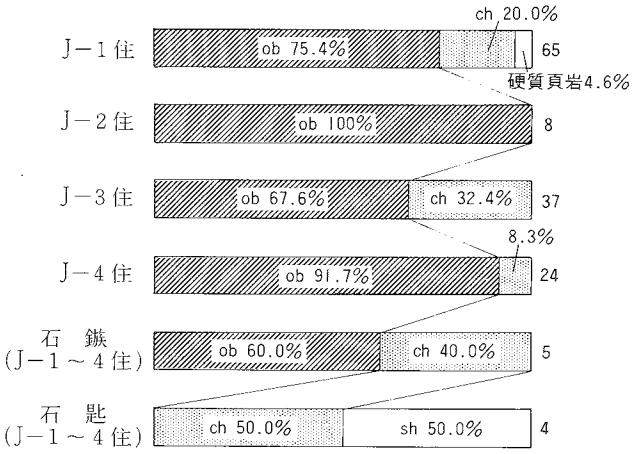
2　縄文時代前期前半の石器群について

今回の調査により、関山期を中心とする４軒の住居址から比較的良好な状態で石器が検出されたので、これらの石器の特徴について、若干まとめてみたい。

第一にＡ類の石器の特徴は、下塚田遺跡Ｊ－１号住居址の項でも少し触れたが、黒曜石が安定して存在していることである。Ａ類剥片における黒曜石の占める割合はＪ－１住67.3%、Ｊ－２住100%、Ｊ－３住73.8%、Ｊ－４住91.7%であり、チャートを圧倒している。この傾向は石鏃に直接反映しており、石鏃における黒曜石の占有率は60%である。したがって、Ａ類においては石鏃が優先石器として存在し、石材の方では黒曜石が優先石材で、チャートが代用石材ということになる。しかし、Ａ類の石器の一員である石匙の場合、チャートを優先石材とし、Ｂ類である在地の頁岩類を代用石材としている。したがって、この段階においては石匙はＡ類とＢ類の「交わり」の部分に存在する器種として認識することができる。

次に、Ｂ類については、スクレイパーＢ類が二大別される。ひとつは打製石斧に比べて大きなものであり、もうひとつは非常に小さい卵形を基本とするものである。このうち、前者は打製石斧よりも大形で、打製石斧の素材剥片と共通したものであり、素材を獲得するための剥片剥離工程は共用しているとみられる。また、後者はその素材を独自に獲得する製作工程を必要とし、これを剥離したと考えられる礫器状の石核が存在する。このように、Ｂ類石器の剥片剥離構造が、二極化して存在するのが、前期前半の石器群の一様相である。

前期前半の石器群はこのほかにも大きな問題をたくさん内包している。今回の調査資料だけではこれらの諸問題についての検討は不十分であるので、今後再検討する必要がある。



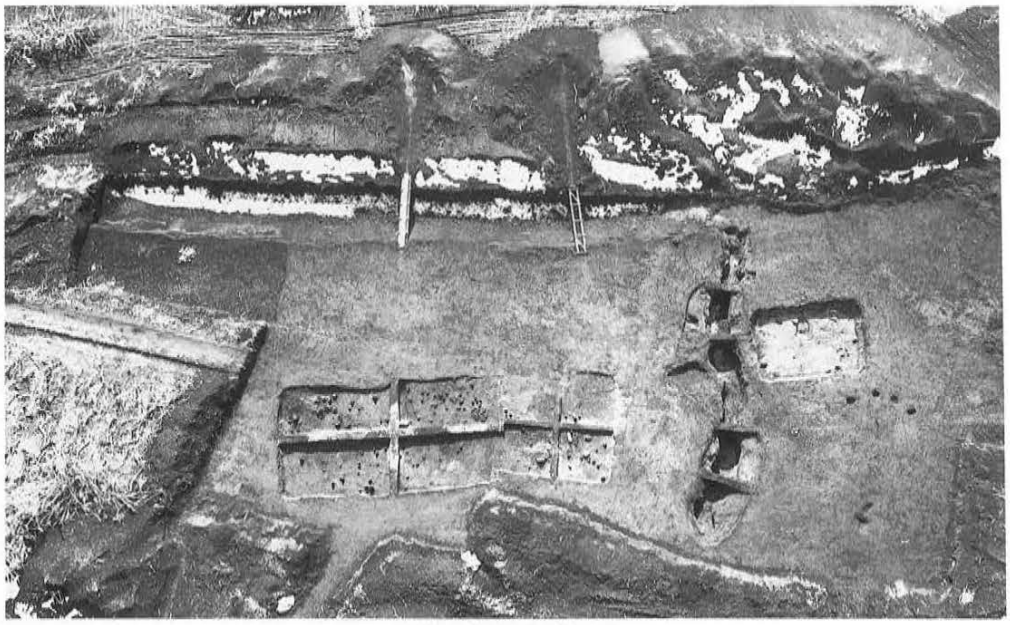
第22図　前期前半のＡ類の石材組成

写　真　図　版

下塚田遺跡A区全景

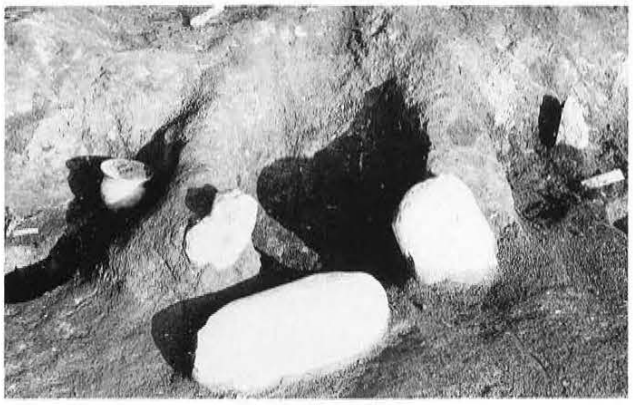
J-1号住居址全景

図版－2

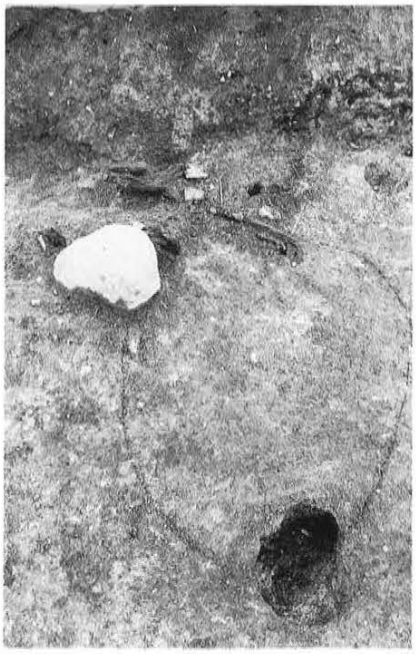


下塚田遺跡Ｂ区全景

H-1号住居址全景



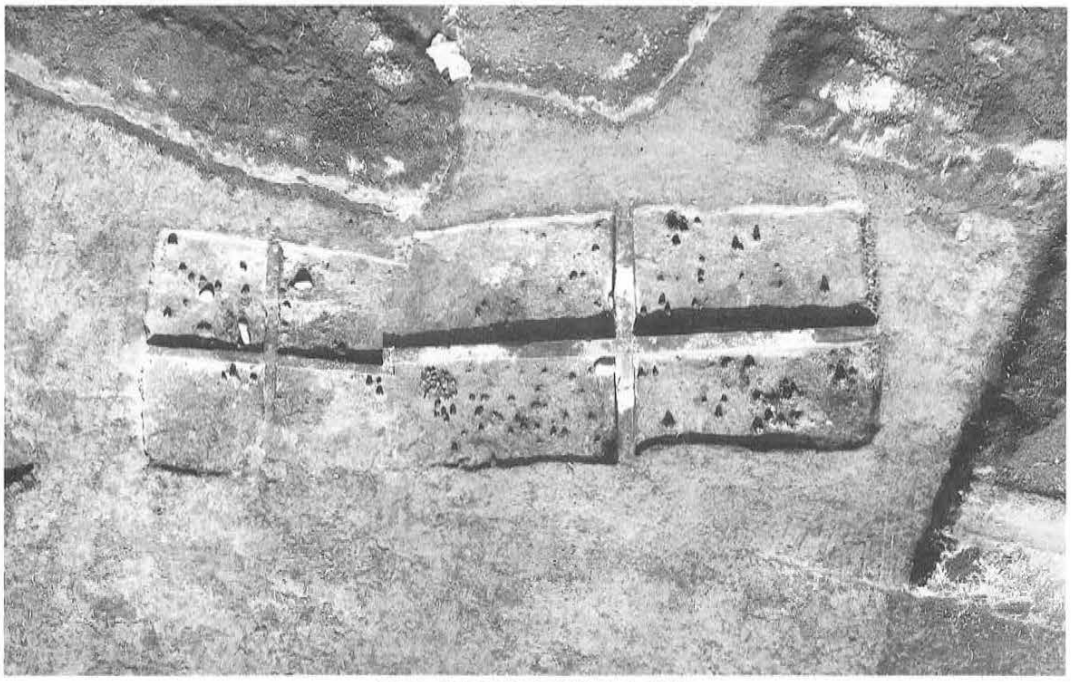
H-1号住居址竈



H-1号住居址炉

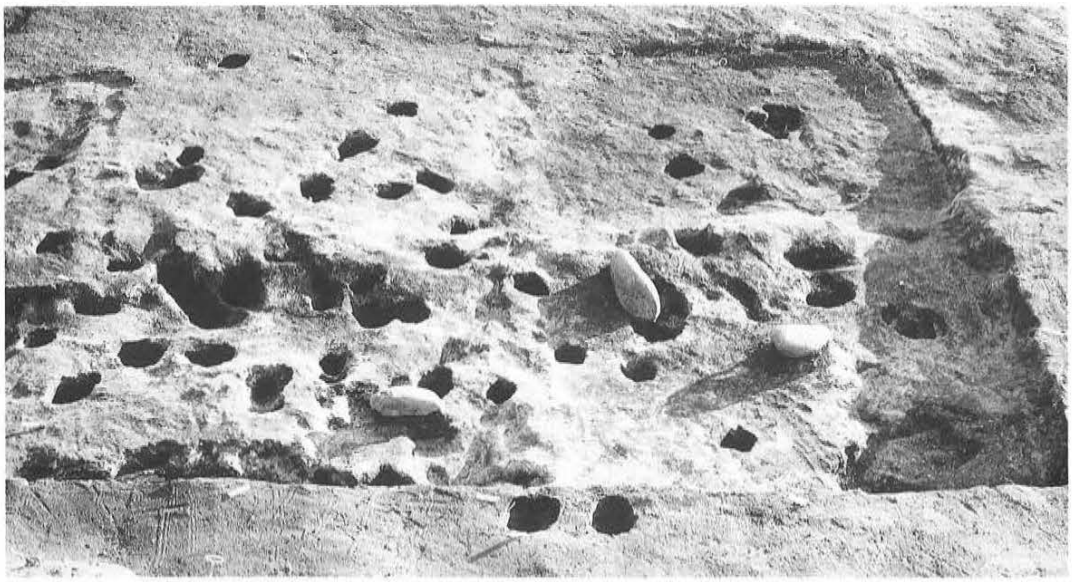
H-2号住居址全景

H-2号住居址竈



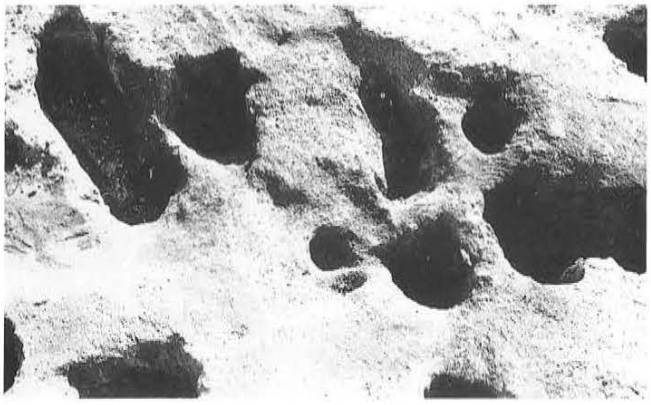
H-3・4号住居址遺物出土状況

図版－4



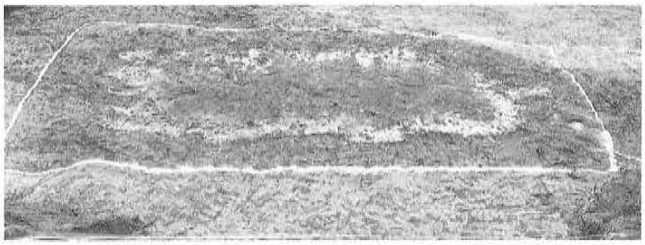
H-3号住居址全景

H-3号住居址炉1

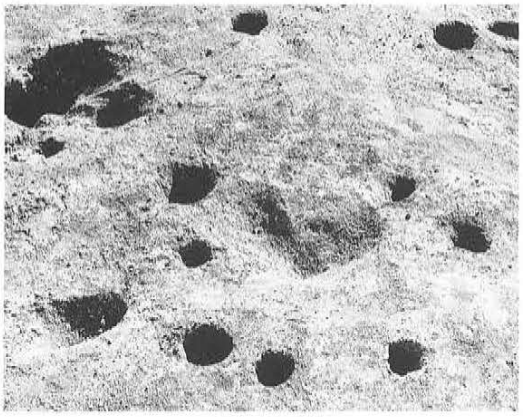


H-3号住居址炉2

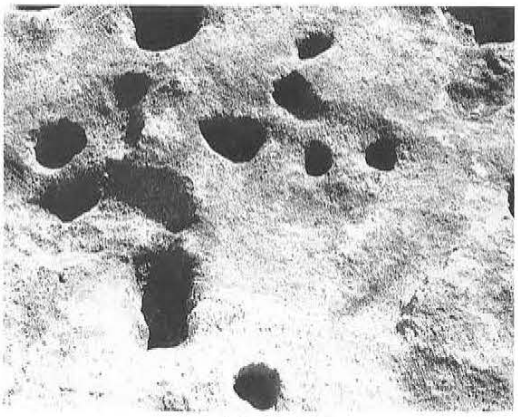
H-4号住居址全景



H-4号住居址確認状況



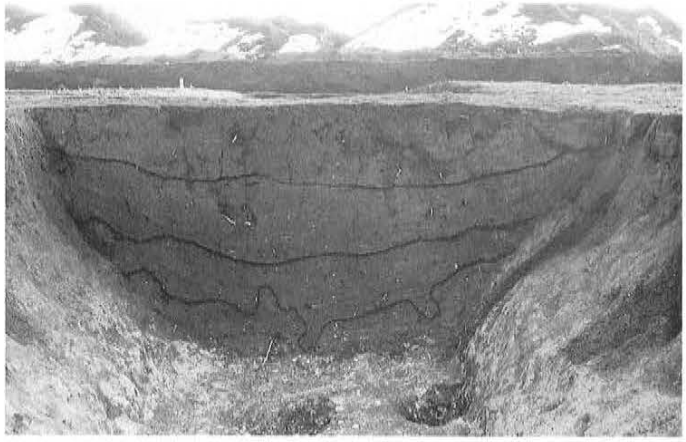
H-4号住居址炉3



H-4号住居址炉1

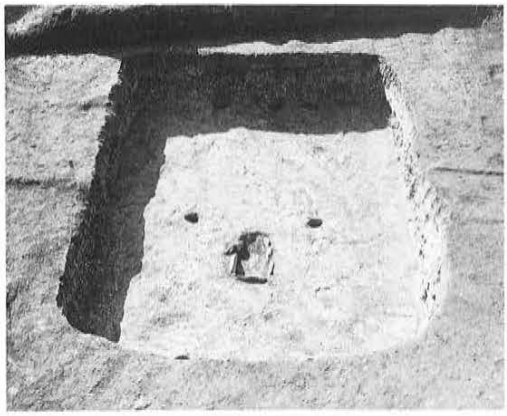
図版－6

M-1号溝土層断面(1)

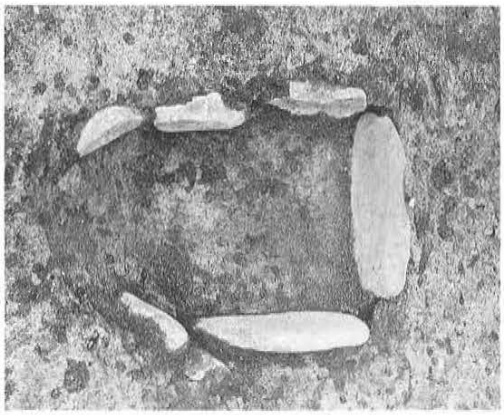


M-1号溝土層断面(2)

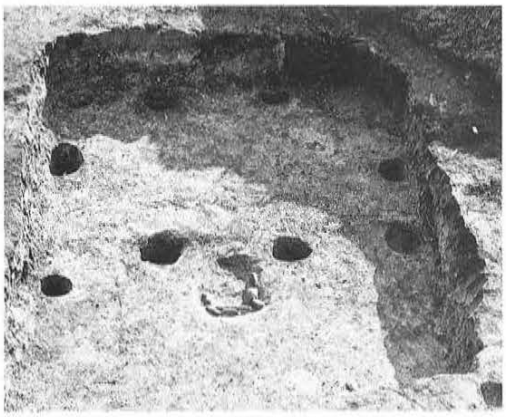
北下原・中原・落合原遺跡全景



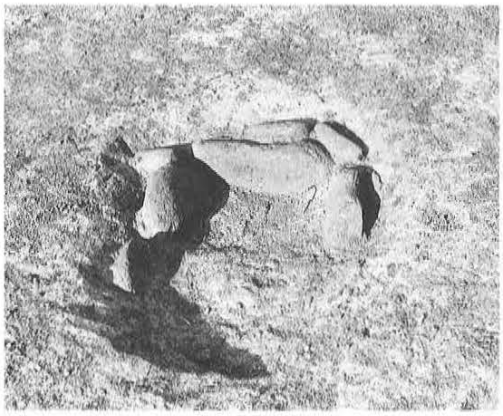
J-2号住居址



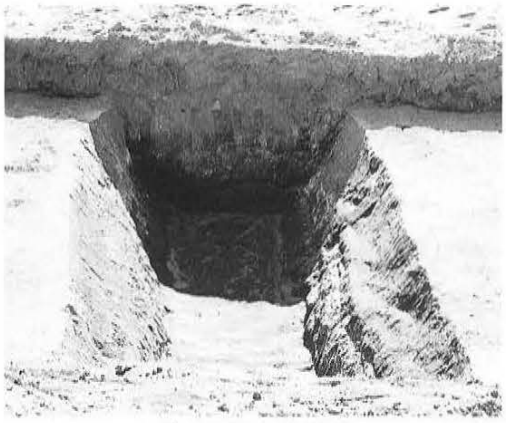
J-2号住居址炉



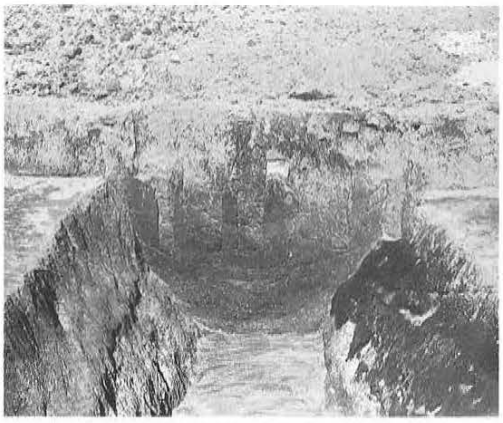
J-3号住居址



J-3号住居址炉



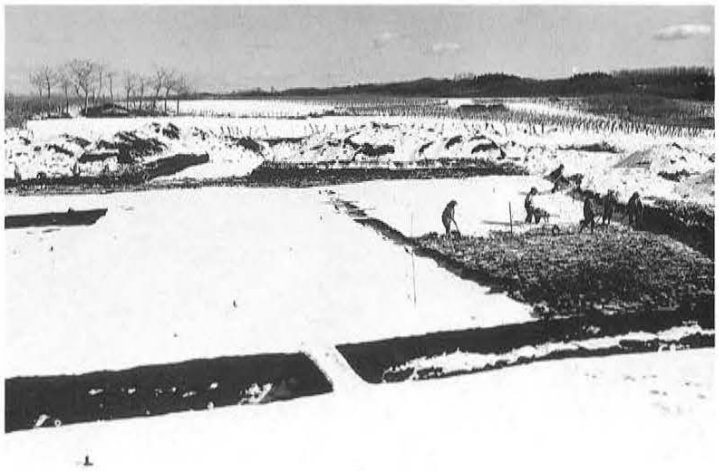
M-4号溝土層断面



M-5号溝土層断面

図版－8

J-4号住居址全景



下塚田遺跡A区作業スナップ

下塚田遺跡B区作業スナップ

中野谷地区遺跡群発掘調査概報 1

— 昭和63年度県営畑地帯総合土地改良事業横
野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発　行　日　平成２年３月31日
編集・発行　安　中　市　教　育　委　員　会
印　　刷　朝日印刷工業株式会社